令和 5(2023)年度

シラバス

- 大学院 -

科目№	MCS01-1R	授業形態	演習	開講年次	１年次
授業科目名	英語文献講読	担当教員 E-Mail	松尾　加代 matsuok@kawasakigakuen.ac.jp		
基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	共通科目		必　　修	2　単位	前　期（30h）
授業概要	専門領域の最新の学術情報を身につけるためには、英語論文を検索して必要な文献を探し出し、それらを正確かつ精緻に読み解く力が必要とされる。本科目では、Nature、Science、Cell、Pro NAS などの雑誌から、認知とリハビリテーションに関する自分に必要な論文を検索し、精読して理解する能力を身につけることを目指す。PubMed などのデータベースを使って検索し精読した論文の発表を繰り返すことを通して、論文読解の力を養う。				
到達目標	1. 論文検索のデータベースが活用できる 2. 英語論文の検索が効率的にできる 3. 英語論文の構成を理解し、必要な情報を素早く入手できる 4. 認知リハビリテーション領域の論文で使用される英語表現や専門用語が理解できる 5. 英語論文の内容を理解できる 6. 英語論文の内容についてディスカッションができる				

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	英語論文を読む目的	英語論文を読む目的を知り、リサーチクエスチョンを考える。	松尾　加代
2	論文の検索方法	データベースを使った論文の検索方法について学び、演習する。	松尾　加代
3	論文の構成（1）	英語論文の構成、および本文のパラグラフの関係性について学ぶ。	松尾　加代
4	論文の構成（2）	英語論文の構成、および本文のパラグラフの関係性について学ぶ。	松尾　加代
5	論文の構成（3）	英語論文の構成、および本文のパラグラフの関係性について学ぶ。	松尾　加代
6	論文検索とアブストラクト（1）	与えられたテーマについて、論文を検索する。入手した論文のアブストラクトを読み、グループで発表する。（グループワーク）	松尾　加代
7	論文検索とアブストラクト（2）	与えられたテーマについて、論文を検索する。入手した論文のアブストラクトを読み、グループで発表する。（グループワーク）	松尾　加代
8	アブストラクトの作成（1）	与えられたテーマについて、論文を検索する。入手した論文の本文を読み、アブストラクトを作成する。（グループワーク）	松尾　加代
9	アブストラクトの作成（2）	与えられたテーマについて、論文を検索する。入手した論文の本文を読み、アブストラクトを作成する。（グループワーク）	松尾　加代

10	アブストラクトの作成（3）	与えられたテーマについて、論文を検索する。入手した論文の本文を読み、アブストラクトを作成する。（グループワーク）	松尾　加代
11	アブストラクトの作成（4）	与えられたテーマについて、論文を検索する。入手した論文の本文を読み、アブストラクトを作成する。（グループワーク）	松尾　加代
12	アブストラクトの作成（5）	与えられたテーマについて、論文を検索する。入手した論文の本文を読み、アブストラクトを作成する。（グループワーク）	松尾　加代
13	論文の発表（1）	個人で検索・精読した論文の概要について発表を行う。	松尾　加代
14	論文の発表（2）	個人で検索・精読した論文の概要について発表を行う。	松尾　加代
15	論文の発表（3）	個人で検索・精読した論文の概要について発表を行う。	松尾　加代

成績評価方法	グループワーク及びグループディスカッションの内容　50% 論文発表の内容　50%			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
参考文献				
事前・事後学修留意事項	基本的な英文法を理解し、自主的に英語文献を読む意欲が求められる。			
研究室	１号館　第４研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№.	MCS02-1R	授業形態	演習	開講年次	1年次
授業科目名	医学英語特論	担当教員 E-Mail	野口　ジュディー judynogu@gmail.com		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	共通科目		必　　修	2　単位	前　期（30h）

授業概要	本科目の目的は、認知リハビリテーション学分野における学術論文の読み書きのスキル、およびアカデミック・プレゼンテーション・スキルを学ぶことである。英語学術論文執筆においては、論文作成のルールを理解すること、具体的な執筆の手順を理解すること、そしてコーパスや機械翻訳などのオンラインツールを活用して実際に学術論文を作成することを試みる。アカデミック・プレゼンテーションに関しては、書き上げた学術論文内容を、どのように口頭発表、ポスター発表に繋げるか、その方法を学ぶ。本科目では、各回のテーマに沿っての講義と連動して、課題作成を進める。全15回で具体的かつ実践的な研究発信スキルを修得する。
到達目標	1. ESP (English for Specific Purposes) の考え方を身に着ける 2. 英語論文の文書パターンが理解できる 3. コーパスやオンラインツールの活用ができる 4. 英語論文を書くことができる 5. 英語での口頭発表ができる

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	英語論文作成の導入	ESP の考え方、英語論文の文書パターン、便利なツールなどを学び、発音実習をする。	野口　ジュディー
2	英語論文執筆の基礎	OCHA 思考法、PAIL 分析、コーパス、ジャンル、ムーブ、スタイルを学び、実習する。	野口　ジュディー
3	英語論文執筆の実践（1）	投稿規定の読み込みなど、論文を書き始める前にするべきことについて実践を通じて学ぶ。	野口　ジュディー
4	英語論文執筆の実践（2）	タイトルの決め方、Abstract の書き方について実践を通じて学ぶ。Portfolio について学ぶ。	野口　ジュディー
5	英語論文執筆の実践（3）	Introduction を分析し、書き方について実践を通じて学ぶ。References の書き方を学ぶ。	野口　ジュディー
6	英語論文執筆の実践（4）	Materials and Methods と Results の書き方について実践を通じて学ぶ。	野口　ジュディー
7	英語論文執筆の実践（5）	Discussion と Acknowledgments を分析し、書き方について実践を通じて学ぶ。	野口　ジュディー
8	英語論文執筆の実践（6）	Cover letter の書き方、英語論文執筆のためのチェックリストの活用の仕方について実践を通じて学ぶ。	野口　ジュディー
9	英語プレゼンテーション（口頭発表）の導入	プレゼンテーションの種類や効果的な発表の仕方について、書き言葉と話し言葉の違いなどを学ぶ。Recitation 課題と Recitation 評価表について理解する。	野口　ジュディー
10	アカデミック・プレゼンテーションの内容（1）	各自 Recitation を実施し、評価表に記入する。口頭発表の PPT の作成準備をする。	野口　ジュディー

11	アカデミック・プレゼンテーションの内容（2）	アカデミック・プレゼンテーションの構成、挨拶と自己紹介、研究の背景と目的、研究の方法（実験の材料、実験装置の構造・動作、実験の概要）、研究の結果の表現方法について実践を通じて学ぶ。 Introduction, body パートを完成させる。	野口　ジュディー
12	アカデミック・プレゼンテーションの内容（3）	プレゼンテーションの Conclusion パートのスライド、スクリプトの表現方法、最終発表の準備について実践を通じて学ぶ。	野口　ジュディー
13	ポスター発表について	ポスター発表の目的、構成とレイアウトを学び、ポスターを作成し、スクリプトも作成する。	野口　ジュディー
14	発表準備	役に立つ英語表現の効果的な活用を確認し、口頭発表・ポスター発表の準備を行う。	野口　ジュディー
15	口頭発表・ポスター発表の本番	受講生各自口頭発表とポスター発表（質疑応答含む）を行う。評価表へ記入し、提出する。	野口　ジュディー

成績評価方法	Tasks 40 %、Portofolio 30%、口頭発表 30 % として総合的に評価する。			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	野口ジュディー・深山晶子・村尾純子・浅野元子	理系英語のライティング Ver. 2	アルク	2020
	野口ジュディー・深山晶子・村尾純子・浅野元子	理系英語のプレゼンテーション Ver. 2	アルク	2020
参考文献				
事前・事後学修留意事項	基本的な英文法を理解し、自主的に英語による論文執筆およびアカデミック・プレゼンテーション（パワーポイントを使った口頭発表・ポスター発表）をしようとする意欲が求められる。			
研究室	e-mail にて連絡すること。	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№.	MCS03-1R	授業形態	講義	開講年次	1年次
授業科目名	リハビリテーション疫学・統計学特論	担当教員 E-Mail	中谷　勇哉 nakatani.y.class@gmail.com		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	共通科目		必　　修	2　単位	前　期（30h）

授業概要	リハビリテーション領域疫学研究法の基礎を講義すると同時に、リハビリテーション分野での実践上の問題点と対応法について事例研究を通じて学ぶ。クリニカルニーズを把握し、リサーチクエスチョンに発展させ、研究仮説を立て、適切な疫学研究を構築する過程を習得し、その解析と解釈について学ぶ。疫学的思考、因果関係、信頼性の確保、疫学研究デザイン、バイアスや交絡因子、回帰と相関、層別解析、モデルに基づく解析、生存時間解析、多変量解析手法、主成分分析手法などの統計学的手法について学ぶ。
到達目標	1. 研究仮説を立てることができる 2. 研究仮説に基づき、適切な研究デザインを組み立てることができる 3. 得られたデータに対し、適切な統計解析法を選択することができる 4. 統計解析をコンピュータを用いて実行することができる 5. 統計解析の結果から、その限界を含め何がいえるかを指摘することができる 6. リハビリテーションにおける EBM の重要性について指摘することができる

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	疫学研究の進め方	疫学研究の進め方の全体像を学修する。	古井　透・ 今岡　真和
2	EBM と情報検索	EBM の概念と情報検索の方法を学修する。	古井　透・ 今岡　真和
3	横断研究と縦断研究	コホート研究における横断研究と縦断研究の違いを理解する。	古井　透・ 今岡　真和
4	観察研究と介入研究	観察研究と介入研究の計画立案の方法を学修する。	古井　透・ 今岡　真和
5	記述統計と推測統計	データの記述と推測に関する統計方法を学修する。	峰久　京子
6	有意差の検定とリスク比較	有意差検定、リスクの比較を理解する。	峰久　京子
7	相関・回帰分析	相関分析と回帰分析を理解し活用する技術を学修する。	峰久　京子
8	リハビリテーション疫学	リハビリテーション疫学の特徴を学修する。	岡　健司
9	パラメーター	疫学解析に必要となるパラメーターの選択と活用を学修する。	岡　健司
10	効果判定	効果判定に必要となるパラメーターの選択と課題を学修する。	岡　健司
11	多変量解析の基礎	分散分析・生存時間分析などについて多変量解析の手法を学修する。	中谷　勇哉
12	エクセルを用いた統計解析	記述統計の出力と基本的な検定についてエクセルを用いる手法を学修する。	中谷　勇哉
13	SPSS を用いた統計解析(1)	SPSS を用いた分散分析と重回帰分析を学ぶ。	中谷　勇哉

14	SPSS を用いた統計解析(2)	SPSS によるロジスティック回帰分析を学ぶ。	中谷　勇哉
15	統計結果の解釈と注意点	バイアス、交絡、第一種の過誤など統計の問題点を理解する。	中谷　勇哉

成績評価方法	課題レポート(30%)と期末レポート(70%)により評価する。			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
参考文献	対馬栄輝	『SPSS で学ぶ医療系データ解析 第２版』	東京図書	2016
事前・事後学修留意事項	毎回復習をして知識を定着させておくこと。コンピュータの基本的な操作については事前に慣れておくこと。			
研究室	１号館 講師控室	オフィスアワー	授業終了後、質問を受け付ける。	

科目№.	MCS04-1R	授業形態	講義	開講年次	1年次
授業科目名	認知機能・認知予備力特論	担当教員 E-Mail	武田 雅俊 masatakeda@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科目区分		単位数		履修期間
	共通科目		必修	2 単位	前期（30h）

授業概要	認知機能は、広義には大脳機能全体をさす場合もあるが、狭義には知覚連合野・運動連合野・辺縁系を中心とした大脳領域により担われる。認知機能は加齢によりゆっくりとした低下を示すだけでなく様々な精神神経疾患により障害される。このような認知機能と人の社会生活との関わりについて学修する。 認知予備力とは、脳の老化や病理過程に拮抗して認知機能を維持する能力のことであるが、認知予備力について、脳予備力と対比させながら理解し、認知予備力を低下・向上させる因子について学修する。脳内病理と臨床症状の間に介在し、認知機能を維持する作用が想定されており、知能(IQ)・教育歴・仕事・趣味・社会参画などの心理社会要因により影響されていることも知られているが、認知予備力の生物学的な本体については殆ど解明されていない。本科目では、認知予備力の概念と最新の知見を総合的に学び、認知予備力を高める方策を考える能力を学修する。 脳科学リハビリテーションのセミナーに参加して、能動的に学習する
到達目標	1. ヒトの生活における認知機能の重要性を理解することができる 2. 認知機能を低下あるいは向上させる因子について理解することができる 3. 認知予備力について最新の知見を理解することができる 4. 認知予備力を低下あるいは向上させる因子について理解することができる 5. 認知予備力の生物学的本体について理解することができる 6. 認知予備力を向上させる戦略について考えることができる

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	加齢による認知機能低下と軽度認知機能障害(MCI)の臨床	認知機能の基盤と脳老化による認知機能低下機序と MCI の病態について学修する。	武田　雅俊
2	認知機能・認知予備力特論 CRRC セミナー（1）	セミナーに参加し、本授業科目の視点から意見を発表する	武田　雅俊
3	認知症の臨床	認知症の臨床病像について学修する。	武田　雅俊
4	認知予備力の概念とライフスタイル	認知予備力の概念とライフスタイルとの関係について学修する。	武田　雅俊
5	認知機能・認知予備力特論 CRRC セミナー（2）	セミナーに参加し、本授業科目の視点から意見を発表する	武田　雅俊
6	認知予備力を低下させる因子	認知予備力を低下させる生物心理社会的要因について学修する。	武田　雅俊
7	認知予備力を維持・向上させる因子	認知予備力を維持・向上させる生物心理社会的要因について学修する。	武田　雅俊
8	認知機能の神経解剖学、正常な家系変化と病的な加齢変化	認知機能の基盤となる神経解剖学、加齢変化につい学修する。	後藤　隆洋
9	認知症脳の病理(マクロ)	認知症をきたす各種疾患の神経解剖学(マクロ)所見について学修する。	後藤　隆洋

10	認知機能・認知予備力特論 CRRC セミナー（3）	セミナーに参加し、本授業科目の視点から意見を発表する	後藤　隆洋
11	認知症脳の病理(ミクロ)	認知症をきたす各種疾患の神経解剖学(ミクロ)所見について学修する。	後藤　隆洋
12	脳老化の生理学的変化と生理学的指標	脳の老化に伴う生理学的変化と生理学的評価方法及び検査手法について学修する。	中村　美砂
13	認知機能低下の生理的変化	認知機能低下の生理的指標について学修する。	中村　美砂
14	認知機能・認知予備力特論 CRRC セミナー（4）	セミナーに参加し、本授業科目の視点から意見を発表する	中村　美砂
15	認知予備力を反映する生理学的変化	認知予備力を反映する生理学的指標について学修する。	中村　美砂

成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	武田雅俊編著	「現代老年精神医療」	永井書店	2005
参考文献				
事前・事後学修留意事項	特になし			
研究室	１号館 学長室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№.	MCS05-1R	授業形態	講義	開講年次	１年次
授業科目名	地域リハビリテーションリーダー論	担当教員 E-Mail	寺山　久美子 terayamak@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	共通科目		必　　修	2　単位	後　期（30h）

授業概要	地域リハビリテーションの主たる支援専門職である療法士は、障害の回復維持予防をはじめ、健康寿命の延伸・介護予防・終末期のＱＯＬ向上等に寄与する役割を持つ。また、その対象は障害者や障害児、認知症者、難病患者ばかりでなく、高齢により健康不安のある一般住民等へと拡大している。活動の場も在宅地域生活を前提とした対象者の入院時からの病院リハビリテーションプログラム、退院後のデイケア・デイサービスあるいは訪問リハビリテーション等の在宅プログラム、老人保健施設や特別養護老人ホーム等の施設リハビリテーションプログラム、障害児への特別支援学校や通園施設への療育プログラム、障害者のための就労支援プログラム、一般企業への支援プログラム等と広い守備範囲を持つ。 本科目を通して、大学院生は地域リハビリテーションの包括的な理解を深め、また地域リハビリテーションに必要なリハビリテーションマネジメントの企画運営と多職種連携による介入とリハビリテーション専門職としてのリーダーシップのあり方を整理し、さらに地域リハビリテーションにおける各種事例を通して実際の概要を学修する。
到達目標	1. 地域ケアシステムと地域リハビリテーションの現状と課題を説明できる 2. リーダーシップ、リーダーに必要とされる要件について説明できる 3. 地域における健康延伸・介護予防・生活期リハビリテーション・障害児支援等におけるリハ職のマネジメント・リーダーシップを説明できる 4. 「我が町の地域包括ケアシステム・地域リハ」の現状・あるべき姿を描くことができる 5. 地域リハに関する実践事例を紹介・評価することができる

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	地域とは、地域リハとは、	本授業のオリエンテーション	寺山　久美子
2	地域包括ケアシステムと地域リハビリテーション	地域包括ケアシステムの概要と現状、地域リハビリテーションの現状と役割について大東市等の実例を学ぶ。	逢坂　伸子
3	地域リハにおけるリーダーシップのあり方と役割を考える	リーダーシップやリーダーの資格など地域リハにおけるマネジメント・リーダーシップについて学ぶ。	寺山　久美子
4	地域リハビリテーションリーダー論 CRRC 研究会への参画　Ⅰ	本授業科目の視点から研究会内容を考察する	寺山　久美子
5	障害児療育と地域リハマネジメント	左記テーマを職能団体、企業等における実践例から学ぶ。	関本　充史
6	障害者就労支援と地域リハマネジメント	左記テーマを職能団体・企業等における実践例から学ぶ。	関本　充史
7	地域リハを支える組織・法・制度の現状と課題、等	左記テーマを総体的に整理した後、大東市の事例で検証する。	逢坂　伸子

8	地域リハビリテーションリーダー論 CRRC 研究会への参画　Ⅱ	本授業科目の視点から研究会内容を考察する	今岡　真和
9	地域リハマネジメントのあり方（健康延伸期・介護予防期・生活期・終末期）	左記テーマを講師の実践経験をもとに検証し、あるべき方向を知る。	伊藤　隆夫
10	介護予防支援とリハマネジメントの管理運営	左記テーマを貝塚市での実践をもとに学ぶ。	今岡　真和
11	生活期・終末期支援とリハマネジメントの管理運営	左記テーマを回復期リハ･訪問リハの実践をもとに学ぶ。	伊藤　隆夫
12	地域リハビリテーションの視点からの地域組織づくり	左記テーマを「成功例･失敗例」を紹介し、「どうすればうまくいくか」を探る。	今岡　真和
13	地域リハビリテーションリーダー論 CRRC 研究会への参画　Ⅲ	本授業科目の視点から研究会内容を考察する	今岡　真和
14	地域リハビリテーションリーダーを考える（1）	各学生があらかじめ調べてきた「わがまちの地域リハ」を上記講義の視点から論議する。	寺山　久美子・今岡真和・伊藤　隆夫・逢坂　伸子・関本充史
15	地域リハビリテーションリーダーを考える（2）	本授業のまとめと振り返り	寺山　久美子

成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	なし			
参考文献	日本リハビリテーション医学会監修	リハビリテーションと地域連携・地域包括ケア	２０１３年	診断と治療社
事前・事後学修留意事項	自分の居住するまたは勤務する地域をもとに「わがまちの又はわが勤務地の地域リハ」をリアルに事前事後に調べ考えて欲しい。			
研究室	１号館 寺山研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№.	MCS06-1R	授業形態	講義	開講年次	１年次
授業科目名	地域支援学特論	担当教員 E-Mail	古井　透 furuit@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	共通科目		必　　修	2　単位	後　期（30h）

授業概要	地域支援学特論では、地域が少子高齢化によって危機に瀕したと言われる現状を踏まえて、その「逆境」にこそ活路を見出そうとする。住民による工夫と連帯を通じて、地域が制度依存を脱し地域の課題の解決に貢献することも含まれうる。これらの挑戦を担う人材を育成するために、リハビリテーション医療機関、NPO、社会福祉法人、行政など多様なセクターのマネジャー層にも教育の機会を提供する。本学教員に加え、地域再生に注目すべき成果を挙げている実務家たちの活動を良く知る外部講師も迎え、一体となって実践的な知識と技能を学修する科目である。
到達目標	1. 介護保険以前の地域課題を論ずることができる 2. 逆転の発想ができる 3. 住民主体の地域づくりを定義できる 4. 脱行政の発想ができる 5. 児童福祉と少子化をつなげて考えることができる 6. 工夫と連帯を解決につなげるアクターを探すことができる

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	地域ケア元年	介護保険以前の地域支援の歴史につい1990年の広島・熊野町の取り組みを学修する。	古井　透
2	障害観と地域１	熊野町の取り組みから地域住民･高齢者の障害観について学修する。	古井　透
3	インクルーシブで持続可能な社会	その後の自験例などから､高齢者の障害観は変えられるのか、その可能性を学修する。	古井　透
4	住民主体の地域づくり１	住民主体の地域づくりの意義(海外との比較から）を学修する。	村川　浩一
5	住民主体の地域づくり（防災）	全国組織における調査研究から､地域防災における住民主体の地域づくりを学修する。	村川　浩一
6	住民主体の地域づくり（認知症）	認知症への初期対策における住民主体の地域づくり事例紹介を学修する。	村川　浩一
7	リーチアウトではなくリーチ・インについて	リハビリテーション医療機関､社会福祉法人の地域における貢献を学修する。	嶋野　広一
8	脱行政の当事者参画	アクセシビリティーについての障害当事者参画による工夫と連帯を学修する。	古井　透・久利　彩子
9	少子化と児童福祉	少子化の進展と児童福祉について学修する。	野村　和樹
10	マネジャーが求められること	自助グループ、NPO、介護施設、行政など多様なセクターのマネジャーが求められることを学修する。	嶋野　広一
11	依存を脱し課題解決につなげるビジョン	産官学連携による認知症予防ボランティア養成講座の企画立案について学修する。	今岡　真和
12	住民による工夫と連帯をどう組織	産官学連携による認知症予防ボランティア養	今岡　真和

	するか	成講座の実施の経過化を学修する。	
13	工夫と連帯を解決につなげるアクター	産官学連携による認知症予防の連帯を成長につなげたアクターは誰なのかを学修する。	今岡　真和
14	キーパーソンになる	住民による工夫と連帯について、NPO、社会福祉法人、行政など多様なセクターのマネジャーの望むことを学修する。	古井　透・村川　浩一
15	まとめ	学生からのフィードバックと質疑応答	古井　透・村川　浩一

成績評価方法	最終講での発表内容(40%)と期末レポート(60%)にて評価する。			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	開講後に指定する			
参考文献				
事前・事後学修留意事項	地域支援の経験を有することが望ましい。			
研究室	１号館 古井研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№.	MSS01-1E	授業形態	講義	開講年次	1年次
授業科目名	認知リハビリテーション学概論	担当教員 E-Mail	武田 雅俊 masatakeda@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科目区分		単位数		履修期間
	支持科目		選択	2 単位	前期（30h）

授業概要	認知リハビリテーション学は、未だ社会的に十分には浸透していない学問領域であるが、①脳機能改善を目指したリハビリテーション、②認知症の人に対するリハビリテーション、③ 認知機能改善を介した行動変容の三領域をカバーしている。認知機能および認知機能障害の生理機能や病理病態を理解したうえで、リハビリテーションの生理学的機序、リハビリテーションの評価、リハビリテーション技術の改善などに結び付ける新しい学問領域について学修する。本科目では、認知機能、認知症、認知行動療法についての最新知見についての論文を精読しながら、これからのリハビリテーション技法の開発につなげる試みについて学修する。
到達目標	1. 認知機能と生活機能との関係を正しく理解することができる 2. 認知機能の生物学的基盤を理解することができる 3. 認知症の病態・症状・評価法を理解することができる 4. 認知行動療法と行動変容の機序を理解することができる 5. リハビリテーションの有効性を高めるための認知機能の役割を理解することができる 6. 認知機能改善を組み合わせた新しいリハビリテーション技法を考えることができる

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	認知リハビリテーション学概論が目指しているもの	ヒトの生活全体における認知機能の重要性とリハビリテーションに期待される課題と目標について学修する	武田 雅俊
2	認知症診療医テキスト 1,2,3 章	脳の老化と認知症、および、認知症の予防と改善への自助努力について理解する	武田 雅俊
3	認知症診療医テキスト 4,5 章	認知症の鑑別と診断の実際について学修する	武田 雅俊
4	認知症診療医テキスト 6,7 章	認知症のしんけいがぞうによる鑑別診断と認知症を来す代表的疾患について学修する	武田 雅俊
5	認知症診療医テキスト 8,9 章	アルツハイマー病の薬物療法と BPSD への対応について学修する	武田 雅俊
6	認知症診療医テキスト 10, 11 章	認知症の身体合併症･神経症状とケアの体制について学修する	武田 雅俊
7	認知症診療医テキスト 12,13,14 章	認知症の人に対する外来､病院での対応の実際と行動制限について学修する	武田 雅俊
8	認知症診療医テキスト 15,16,17 章	認知症の人の意思能力､地域医療と介護保険制度、社会福祉制度について学修する	武田 雅俊
9	認知症診療医テキスト 18,19,20 章	認知症の人を支える地域ケア、社会生活支援、について学修する	武田 雅俊
10	認知症患者に対するリハビリテーション技法の考え方	認知症の人に対する有効なリハビリテーションの戦略について学修する	武田 雅俊
11	精神療法・生活療法・薬物療法とリハビリテーションの統合	認知症に対する精神療法・生活療法・薬物療法をどのようにリハビリテーションとして統合するかを学修する	武田 雅俊

12	認知行動療法・メタ認知トレーニング	認知行動療法およびメタ認知トレーニングの技法を学修する	武田 雅俊
13	脳刺激法・ニューロモデュレイション	脳刺激法(ECT, rTMS, DBS)の方法とニューロモデュレイションのリハビリテーションへ適応について学修する	武田 雅俊
14	薬物療法のリハビリテーションへの応用	幻覚誘発剤(LSD, シロシビン)、ケタミンなど中枢作用薬物の)リハビリテーションにおける応用ついて学修する	武田 雅俊
15	リハビリテーションの新しい技術	将来的な認知リハビリテーションの技法を学修する	武田 雅俊

成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	日本精神神経学会	認知症診療医テキスト	新興医学出版	2019
	日本精神神経学会	認知症診療医テキスト 2 症例と Q&A	新興医学出版	2021
参考文献	S.ティミラス、武田雅俊、大内尉義	老化の生命科学 -分子から生理へ、そして臨床へ-	アークメディア出版	2007
事前・事後学修留意事項	日本製審神経学会による認知症診療医テキスト 1 と 2 を教科書と参考書として使用するので、事前に各自読んでいてほしい			
研究室	1 号館 学長室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№	MSS02-1E	授業形態	講義	開講年次	1年次
授業科目名	認知リハビリテーション学研究方法論	担当教員 E-Mail	中村 美砂 nakamuram@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科目区分		単位数		履修期間
	支持科目		選択	2 単位	前期（30h）

授業概要	認知リハビリテーション学研究の意義や目的を理解することを目指し、研究の段階的なプロセス（研究課題の発見、研究デザインと研究方法の決定、データの分析、研究結果の解釈と考察）における基本事項をまず理解する。研究目的を達成するためには、その目的に合った適切な研究方法を用いることが大切である。「認知リハビリテーション学」は広範な領域を網羅しており、それゆえその研究方法も多様である。本科目では、生物学的、心理学的、社会学的、教育学的観点から、それぞれの研究手法について知識を深める。併せて、研究者として備えるべき倫理観を醸成し、遵守すべき規範を修得する。
到達目標	1. 研究の過程について理解することができる 2. 文献・情報の蒐集を行うことができる 3. 問題解決に最適な研究方法について理解できる 4. 研究内容の発表方法を理解できる 5. 研究者としての倫理規範を遵守することができる

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	認知リハビリテーション学研究方法論序論	研究の意義と概念について学ぶ。	中村 美砂
2	研究の理論的枠組みと仮説	科学的思考と研究過程について学ぶ。	中村 美砂
3	研究計画の立案、計画書作成	研究計画書の作成方法について学ぶ。	中村 美砂
4	研究の倫理規範	研究者としての態度、研究倫理を学ぶ。	中村 美砂
5	データの分析方法と図表の作成	データの解析方法と表示方法について学ぶ。	中村 美砂
6	ヒトを対象とした研究 (1)	認知機能検査について学ぶ。	中村 美砂
7	ヒトを対象とした研究 (2)	アンケート調査の方法について学ぶ。	中村 美砂
8	ヒトを対象とした研究 (3)	観察研究について学ぶ。	中村 美砂
9	ヒトを対象とした研究 (4)	介入研究について学ぶ。	中村 美砂
10	動物を対象とした研究	動物を対象とした研究の意義と実際について学ぶ。	中村 美砂
11	細胞系を用いた研究	細胞系を用いた研究の意義と実際について学ぶ。	中村 美砂
12	文献の活用方法	文献･資料の検索、蒐集、利用方法を学ぶ。	中村 美砂
13	研究成果のまとめと論文化	研究論文の書式、作成方法について学ぶ。	中村 美砂
14	学会発表と論文投稿	学会発表と論文投稿の方法について学ぶ。	中村 美砂

15	総括	以上のまとめと振り返りを行う。	中村 美砂

成績評価方法	筆記試験(50%)・レポート(50%)で評価する。			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	各講義でオリジナル資料を配付する			
参考文献	神里彩子、武藤香織	医学・生命科学の研究倫理ハンドブック	東京大学出版会	2015
	出村 慎一 他	健康・スポーツ科学のための卒業論文/修士論文の書き方	杏林書院	2015
事前・事後学修留意事項	特になし			
研究室	１号館　中村研究室	オフィスアワー	水曜日 12:00-13:00	

科目№.	MSS03-1E	授業形態	講義	開講年次	1年次
授業科目名	リハビリテーション教育学特論	担当教員 E-Mail	谷口　英治		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	支持科目		選　　択	2　単位	後　期（30h）

授業概要	医療現場において、養成機関から卒業したばかりの新人へのオン・ザ・ジョブ・トレーニングやセラピストのキャリアアップについては、個々の努力や医療機関での卒後研修、そして職能団体で取り組んでいる生涯教育制度の活用などに委ねられているが、卒前教育の臨床実習指導にあたる現場療法士も大学院生指導で抱える悩みや課題は大きくなっている。卒前・卒後を通じ一貫した、技術水準の評価軸や到達目標などを明確化するような体系的なビジョンが必要であり、リハビリテーション教育学の深化が強く求められている。 本科目では、医療技術教育におけるテクニカルスキル向上のために有効な指導体制とは何かを学修し、医療現場におけるチーム医療での立ち位置と職業的アイデンティティの再確認を促す必要性を理解し、さらに教育学的諸技法をはじめ、広く学際的視点から様々な理論など、現状を多角的に分析するのに有用な基礎を培う。また、卒前・卒後を通じ療法士に必要な医療技術教育の在り方を科学的根拠に基づいた思考過程から捉える視点を学修する。
到達目標	1. リハビリテーション教育学特論（医療技術教育）の現状と課題、および作業療法教育における医療技術教育について理解できる 2. 医療現場におけるチーム医療・多職種連携について理解できる 3. 理学療法教育における医療技術教育について理解できる 4. 言語聴覚教育における医療技術教育について理解できる 5. 専門職教育とは、卒後教育システムとは、科学的根拠に基づいたリハビリテーション専門職の役割などについて理解できる 6. 診療参加型実習について理解できる

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	序論　リハビリテーション教育学概論	リハビリテーション教育学（医療技術教育）の現状と課題を解説から、科目の目指す内容を学修する。	谷口　英治
2	医療技術教育についての課題	卒前に実施される技術教育（臨床ゼミ、プレ実習、OSCE、臨床実習など）について学修する。	谷口　英治
3	作業療法教育における医療技術教育について①	技術水準の評価軸と到達目標(診療参加型実習の評価・到達基準など)について最新の情報を学修する。到達基準)	谷口　英治
4	作業療法教育における医療技術教育について②	卒前臨床教育での問題解決型学修(PBL)とチーム基盤型学修の現状と問題点を学修する。	谷口　英治
5	卒前・卒後教育について	卒後教育について・屋根瓦式教育体制の導入について学修する。	岡田　守弘
6	医療現場におけるチーム医療について	医療現場におけるチーム医療・多職種連携について学修する。	岡田　守弘
7	理学療法教育における医療技術教育について①	技術水準の評価軸と到達目標についての最新の情報を学修する。	酒井　桂太
8	理学療法教育における医療技術教育について②	臨床全教育での問題解決型学修(PBL)とチーム基盤型学修の現状と問題点を学修する。	酒井　桂太

9	言語聴覚教育における医療技術教育について①	技術水準の評価軸と到達目標についての最新の情報を学修する。	塚本　能三
10	言語聴覚教育における医療技術教育について②	卒前臨床教育での問題解決型学修(PBL)とチーム基盤型学修の現状と問題点を学修する。	塚本　能三
11	専門職教育について	インストラクショナル・デザイン(ADDIE モデル、ARCS 動機づけモデルなど)について学修する。	古井　透・ 中柗　俊介
12	卒後教育システムについて	卒後教育システムへの要素について学修する。	古井　透・ 中柗　俊介
13	リハビリテーション専門職について	科学的根拠を重視するリハビリテーション専門職の役割について学修する。	古井　透・ 中柗　俊介
14	診療参加型実習について①	卒前・卒後にかけて一貫性のある教育手法である「診療参加型実習」について学修する。	村西　壽祥
15	診療参加型実習について②	「診療参加型実習」の実践例も提示しながら教育効果について学修する。	村西　壽祥

成績評価方法	課題レポート(50%)と課題について各担当教員の指示・提案に対する応答(50%)を総合的に評価する。			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
参考文献	才藤栄一監、金田昌夫編ほか	PT・OT のための臨床技能と OSCE　機能障害・能力低下への介入編	金原出版	2017
	才藤栄一監、金田嘉清編ほか	PT・OT のための臨床技能と OSCE　コミュニケーションと介助・検査測定編　第２版補訂版	金原出版	2020
	中川法一編	セラピスト教育のためのクリニカル・クラークシップのすすめ　第３版	三輪書店	2019
	岩崎テル子、小林幸治編	作業療法のクリニカル・クラークシップガイド	三輪書店	2017
事前・事後学修留意事項	各担当教員から配布された資料などを活用し、保健医療福祉に関わる専門職の果たす役割を理解し、多職種連携の要として協働する必要性を認識し行動すること。			
研究室	１号館 谷口研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№	MSS04-1E	授業形態	演習	開講年次	1年次
授業科目名	リハビリテーション教育学演習	担当教員 E-Mail	古井　透 furuit@kawasakigakuen.ac.jp		
基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	支持科目		選　　択	2　単位	後　期（30h）
授業概要	この不確かな時代において、リハビリテーションの目指すところは、その途中には様々な過程があっても、究極的には、インクルーシブで持続可能な世界を実現することであろう。実際には、リハビリテーション医療にかかわる医師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士などが、当事者を中心としたチームとして共通目的に向かっていくプロセスが展開されることになる。しかし、様々な立場の人々が問題意識を共有していく過程では、リハビリテーション教育学特論で学んだ教育学的諸技法や学際的視点によって、問題構造を解明し深化させることが有用となる。 本科目は、大学院生が持参した現場の現状認識から始める。リハビリテーション専門職の卒前・卒後の一貫した教育体系のあるべき姿、あるいは現場での多職種連携の実現へ向け、様々な立場の違いを乗り越えて、確かな学術的裏付けを獲得していく過程を、多彩なバックグラウンドの講師陣による演習により学修する。				
到達目標	1. 臨床現場で求められる専門的スキルの到達目標について説明できる 2. 臨床現場で求められるノンスキルテクニカルスキルの到達目標について説明できる 3. リハビリテーション専門職の卒前・卒後のあるべき教育体系について持論が説明できる 4. 協働的関係の構築による多職種連携を模擬実施できる 5. 臨床現場での療法士の当事者研究ができる 6. 本学が果たすべき役割について持論が展開できる				

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	問題意識確認	アイスブレイクと各受講生の自己紹介により、個別の問題意識の背景を探索する。	古井　透・岡田　守弘
2	臨床現場の現状把握	各人の活動環境における専門的スキル・ノンスキルテクニカルスキルの到達現状をインタラクティブに突き詰めていく。	古井　透・岡田　守弘
3	臨床教育の体系	各人の領域におけるリハビリテーション専門職の卒前・卒後の教育体系がどうなれば一貫した体系となるのか議論を深める。	岡田　守弘
4	医学教育の体系	医学教育における卒後トレーニングの各領域での実情を吟味する。	岡田　守弘
5	連携と協働	多職種連携をロールプレイによって演習し、協働的関係の構築をシュミレーションする。	古井　透・岡田　守弘
6	事例研究方法論	困難事例におけるケース会議の設定の仕方、会議の持ち方についてのコーチングを学ぶ。	岡田　守弘
7	理学療法教育 UP TO DATE	理学療法における技術水準の新評価軸や到達目標への職能団体の取り組みを学ぶ。	酒井　桂太
8	作業療法教育 UP TO DATE	作業療法における技術水準の新評価軸や到達目標への現職能団体の取り組みを学ぶ。	谷口　英治
9	言語聴覚教育 UP TO DATE	言語聴覚療法領域の技術水準の評価軸や到達目標への職能団体の取り組みを学ぶ。	塚本　能三
10	臨床現場との乖離	各人の活動環境における卒前教育レベル・卒後教育レベルの水準について、各専門職職能団体	古井　透・中松　俊介

		が目指している目標と比較し記録することを学ぶ。	
11	課題吟味	現状と目標の間を埋めるのに必要な要素を列挙し、優先順位を明確にしながら洗い出す。	古井　透・中松　俊介
12	改善計画立案	現状と目標の間を埋めるための第一段階の計画を立案する。	古井　透・中松　俊介
13	改善計画発表	各受講生の環境における改善策の発表の資料を吟味する。	古井　透・中松　俊介
14	当事者研究を知る	各受講生の環境における改善策を発表し質疑によりブラシュアップする。その際、療法士の当事者研究という視座を学ぶ。	古井　透・中松　俊介
15	資源開発と条件整備	各受講生の環境における改善策が継続的に実現可能にするための社会資源を検討し、本学が果たすべき役割を議論してまとめる。	古井　透・中松　俊介

成績評価方法	成果物の発表内容(50%)および演習への取組内容(50%)によって総合的に評価する。			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	中村 文子，ボブ・パイク	研修デザインハンドブック	日本能率協会ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄｾﾝﾀｰ	2018
参考文献	鈴木 克明，市川 尚，根本 淳子	インストラクショナルデザインの道具箱 101	北大路書房	2016
	ローナ・フィリン，ポール・オコンナー，他	現場安全の技術―ノンテクニカルスキル・ガイドブック	海文堂出版	2012
事前・事後学修留意事項	予め教科書を通読しておくこと			
研究室	１号館 古井研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№	MSS05-1E	授業形態	講義	開講年次	１年次
授業科目名	地域社会福祉制度特論	担当教員 E-Mail	野村　和樹 nomurak@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	支持科目		選　　択	２　単位	前　期（30h）

授業概要	社会福祉における施策は法律を根拠として実施される。地域における社会福祉の様々な支援も同様である。社会福祉の制度にのっとり地域で展開される支援を地域社会福祉の制度とし学修を進める。社会福祉の施策に基づく支援により、基本的要求が充たされ尊厳の回復、健康で文化的な生活を取り戻すことも、社会的なリハビリテーションと捉えた学修を展開する。 本科目においては、地域における支援の形態とその根拠なる法律に着目して学修を進めたい。まずは法律が制定される過程、そして、その法律を根拠として施行される施策を理解できるように、児童福祉の領域を取り上げ、児童福祉の根拠となる法律である児童福祉法の制定に遡り、児童福祉についての理解を深めたい。また、児童福祉法と身体障害者福祉法の関係、知的障害者福祉法制定との関わりを明らかにすることにより、障がい者福祉にも言及し、障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援する法律により地域における支援の実際から地域リハビリテーションのあり方を学ぶ。 次いで、『児童の権利に関する条約』を見ることにより、今日の児童の権利について学修したい。 ある事象が社会問題として取り上げられ、それが人間の尊厳を脅かしたり、あるいは健康で文化的な最低限度の生活を営むための基本的要求が充たされない事態に陥るときに、それらの支援の施策として設けられた法制度の例として、児童虐待を取り上げて、事象の発生から社会問題に発展する経過、および施策の根拠となる『児童虐待の防止等に関する法律』が制定される過程を学修する。「児童虐待防止対策の抜本的強化」等に見られる「児童虐待防止対策を強化するための児童福祉法等の改正法」にあるように、実際の施策と根拠となる法律の関係を学ぶ。 また、近年、子育て支援の施策として、子ども・子育て支援法が制定され、子育て世代包括支援センターが設けられているが、同センターでは、地域における子どもの育みに関わる問題の発見から、それを解決する支援の確立が求められている。本科目では、事例検討を通して、地域における施策のあり方を学修する。
到達目標	1. 社会福祉に関わる法律が制定された過程を理解できる 2. 権利に関わる国際法が制定された過程を理解ができる 3. 法律を根拠とした支援ならびに制度が理解できる 4. 制度を根拠とし、個々に応じた支援計画が立案できる 5. 事例を通して社会的リハビリテーションが理解できる

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	『児童福祉法』Ⅰ	今日の日本における社会福祉のはじまりともいえる『児童福祉法』の成立過程について学ぶ	野村　和樹
2	『児童福祉法』Ⅱ	『児童福祉法』の内容について学ぶ	野村　和樹
3	『身体障害者福祉法』	『身体障害者福祉法』の成立過程について学ぶ	野村　和樹
4	『知的障害者福祉法』	『知的障害者福祉法』の成立過程について学ぶ	野村　和樹
5	児童福祉と障害者福祉	児童福祉と障害者福祉との関わりを明らかにし、『障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援する法律』を根拠として地域における支援を学ぶ	野村　和樹

6	『児童の権利条約』	『児童の権利条約』の成立過程について学ぶ	野村　和樹
7	児童虐待防止法の制定Ⅰ　イギリス産業革命と児童虐待防止法制定	イギリスにおいて 1889 年に制定された『児童虐待防止法』の背景について学ぶ	野村　和樹
8	児童虐待防止法の制定Ⅱ　社会問題化から現行の『児童虐待の防止等に関する法律』の制定へ	今日の日本における児童虐待の現状を、資料を通して読み取る方法を学ぶ	野村　和樹
9	『児童虐待の防止等に関する法律』と制度施策	『児童虐待防止法』から児童虐待の定義を理解し、児童虐待について学ぶ	野村　和樹
10	『児童虐待の防止等に関する法律』と関連する法律	児童福祉に関わる法律から、被虐待児、個々に応じた様々な支援について学ぶ	野村　和樹
11	『児童虐待の防止等に関する法律』等における支援	被虐待児に関わる支援について学ぶ	野村　和樹
12	児童虐待に関わる施設と支援	施設退所後の自立支援の実際から、社会的リハビリテーションについて学ぶ	野村　和樹
13	児童虐待に関する事例検討	児童虐待に関わる事例から、虐待による心身への影響を理解し、支援方法の立案について学ぶ	野村　和樹
14	児童虐待予防のための包括的な支援	子育て世代包括支援センターと子ども子育て支援法に定められている「利用者支援事業」との関係を理解し、健やかな育ちの環境を学ぶ	野村　和樹
15	総括	各回の講義を振り返ることで、法律を根拠とした支援の関係を学ぶ	野村　和樹

成績評価方法	授業時に課す小レポート 30%、最終レポート 70%			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	授業内で適宜レジュメ、資料を配布			
参考文献	授業内で適宜紹介する			
事前・事後学修留意事項	配付された資料をクリティークし、知識の集積を行い、自分の考えをまとめる。			
研究室	１号館 野村研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№.	MSS06-1E	授業形態	講義	開講年次	1年次
授業科目名	地域ケアマネジメント特論	担当教員 E-Mail	古井　透 furuit@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	支持科目		選　　択	2　単位	前　期（30h）

授業概要	2018年4月施行の社会福祉法の改正においては、高齢期のケアを念頭に置いた2025年を見据えた「地域包括ケアシステム」を深化させ、障がい者、子どもなどへの支援や複合的な課題にも広げた2040年を展望した「地域共生社会」へのシフトが明示されている。この地域共生社会の実現のために、「地域課題の解決力の強化」、「地域を基盤とする包括的支援の強化」、「地域丸ごとのつながりの強化」、「専門人材の機能強化、最大活用」が改革の骨格とされている。 本科目では、個別ケースの自立支援に資するケアマネジメントの支援、支援困難事例などを通した地域課題の発見、データを収集しエビデンスに基づく地域分析を行うことにより、地域の新たな資源開発や政策形成など、職種を問わず、保健医療福祉協働の実践力の向上を図り、地域共生社会に対応できるケアマネジメントの実践力を修得する。
到達目標	1. ケアマネジメント実践のための理論が理解できる 2. ケアマネジメント実践のための評価方法・マネジメントプロセスが理解できる。 3. 地域共生社会に対応できるケアマネジメントについて理解できる 4. 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの概要について説明することができる。 5. 精神障害者が暮らしやすい地域づくりのための、リハビリテーション関連職種の役割を説明することができる。 6. 地域課題の解決のために地域に根差した社会資源を探り、活かす方法が理解できる 7. 当該地域の実情に合った地域特有のニードを分析できる

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	ケアマネジメントの定義と歴史（アメリカ・イギリス）	ケアマネジメントの定義と成り立ちについて歴史的背景より学ぶ	古井　透
2	わが国における在宅福祉の展開とケアマネジメントの導入	わが国における高齢者在宅福祉の展開と介護保険制度の創設とその意義について学ぶ。	古井　透
3	ケアマネジメントの構成要素と機能	ソーシャルワークとケアマネジメントの構成要素と機能について学ぶ。	古井　透
4	ケアマネジメントの方法と過程	介護保険におけるケアマネジメントの方法と過程について学ぶ。	古井　透
5	ケアマネジメントを可能にする地域のネットワーク作り	多職種協働による自立支援に資するケアプランの作成のためのスーパービジョンや、サービス担当者会議、地域ケア会議によるネットワーク作りについて学ぶ。	古井　透
6	地域包括ケアシステムの実現に向けた地域ケア会議	地域ケア会議の5つの機能と、地域ケア個別会議・地域ケア推進会議について学ぶ。	古井　透
7	地域共生社会に向けた包括的支援	多機関・多職種の協働・連携と、住民参加による新しい地域包括支援体制のビジョンについて学ぶ。	古井　透
8	精神保健医療福祉政策の動向	精神保健医療福祉に関する政策の動向について、精神障害リハビリテーションに関連するも	―

		のを中心に学ぶ。	
9	精神障害者ケアマネジメントと精神障害者にも対応した地域包括ケアシステムに向けての概要	精神保健医療福祉に関する政策の動向について、精神障害リハビリテーションに関連するものを中心に学ぶ。	―
10	精神障害者ケアシステムの構築プロセスと構築に必要な要素	精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築に向けた、国の取り組みやリハビリテーション職種の関与について学ぶ。	―
11	障害者総合支援におけるケアマネジメント	障害者総合支援法に基づく支援方法を理解し、その活用の実際を学ぶ。	野村　和樹
12	児童福祉とケアマネジメント	子ども子育て支援制度の概要を理解し、その実際例を学ぶ。	野村　和樹
13	実践事例から学ぶ地域課題への先進的取り組み	先進的に取り組まれている事例を提示し、地域の特徴とそれに応じた支援を学ぶ。	野村　和樹
14	実践事例から学ぶ個別ケアと地域分析	先行事例より、個別ケースの自立支援と地域の持つニーズを分析し、問題解決をはかる方法を学ぶ。	野村　和樹
15	総括	地域共生社会に対応できるケアマネジメントについてのまとめとフィードバックを行う。	古井　透

成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	必要に応じて配布または指定する			
参考文献	適宜紹介する			
事前・事後学修留意事項	次回の授業計画の範囲を予習し、討論に参加できるように準備をしてください。主体的参加を望みます。			
研究室	１号館 古井研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№.	MSS07-1E	授業形態	講義	開講年次	１年次
授業科目名	心のサイエンスと臨床心理学	担当教員 E-Mail	武田 雅俊 masatakeda@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	支持科目		選　　択	２　単位	後　期（30h）

授業概要	ヒトは、外界からの刺激と情報を取り入れて、脳内に蓄えられた経験や知識と照らし合わせて自分の意識的な行動を決定するが、ヒトの行動には、意識的な行動だけでなく、疾病や性格や薬物などに影響された無意識的な行動もある。本科目では、ヒトの行動決定メカニズムについて理解するとともに、多くの人の行動が生物学的側面と心理学的側面から説明できることを学修し、いくつかの精神症状や心理学的現象の発症メカニズムについて学修することにより、脳と心の懸け橋としての臨床症状について、理解を深める。
到達目標	1. 性格に基づく行動パターンの違いを理解できる 2. 脳内情報処理過程について理解する 3. 脳老化に伴う行動パターンや心理学的変化を理解する 4. ヒトの行動決定の様式を生物学的・心理学的に説明できる 5. 高齢者の心理・行動パターンを理解できる 6. メタ認知、歪・誤認知のメカニズムを知り、行動パターンを理解する

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	行動パターンと性格	ヒトの行動形式や行動パターンと性格との関係について学ぶ。	武田 雅俊
2	脳が見ている世界	脳視覚野における視覚系情報処理の方法について説明し、錯視・幻視の機序を学ぶ。	武田 雅俊
3	脳内報酬系と嗜癖・常同行動	ヒトが繰り返して行う行為行動について脳内報酬系の関与を学ぶ。	武田 雅俊
4	寿命と高齢者の行動パターン	高齢者に特徴的な行動パターンと認知機能との関係について学ぶ。	武田 雅俊
5	高齢者の認知機能・軽度認知障害	加齢による脳老化と認知機能低下との関係について学ぶ。	武田 雅俊
6	自動運転と人工知能(AI)	ヒト認知機能と人工知能(AI)との対比について自動運転を例にして学ぶ。	武田 雅俊
7	脳科学は進歩したのか-この百年間の脳科学の進歩	百年間の脳科学の歴史を振り返りながら、ヒト脳機能の変化と将来について学ぶ。	武田 雅俊
8	心理学から見た感覚・知覚	心理学領域で研究される感覚・知覚について学ぶ。	松尾　加代
9	社会的認知	社会的認知について概説した後、社会的認知の障害について学ぶ。	松尾　加代
10	メタ認知（1）	メタ認知判断の基本および研究の方法について学ぶ。	松尾　加代
11	メタ認知（2）	高齢者の記憶や判断など認知機能についてメタ認知の観点から学ぶ。	松尾　加代
12	メタ認知（3）	コミュニケーションの中で起こる誤解についてメタ認知の観点から学ぶ。	松尾　加代

13	情動と認知	情動と認知の関係、およびそれぞれに及ぼす影響について、両側面から考える。	松尾　加代
14	認知バイアス	日常生活の中で頻繁に繰り返し発生する認知バイアスについて学ぶ。	松尾　加代
15			松尾　加代

成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	武田雅俊、工藤喬	「心のサイエンス -精神医学の進む道-」	メディカルレビュー社	2006
	武田 雅俊、加藤 敏、神庭重信	「Advanced Psychiatry-脳と心の精神医学-」	金芳堂	2007
参考文献				
事前・事後学修留意事項	特になし			
研究室	１号館 学長室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№.	MSS08-1E	授業形態	講義	開講年次	１年次
授業科目名	認知機能解析学	担当教員 E-Mail	後藤　隆洋 gotot@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	支持科目		選　　択	2　単位	後　期（30h）

授業概要	認知機能の低下が持続すると脳の障害である認知症を呈する。認知症の病態は、分子生物学的手法を駆使し精神神経医学的に解析され、脳機能を支えるニューロンや神経伝達物質の動態など分子レベルで解明されつつある。「こころ」も分子や細胞の変化で説明しようと試みられている。認知症の発症機序さらに認知症に有効な予防やリハビリテーションを明らかにすることを目指して、本科目ではニューロンの性質・作用の理解を基盤とし、脳内でどのようなメカニズムで認知機能が遂行され、そしてどのような要因で破綻するか、最新の解析で得られたデータに基づき、分子から個体、基礎から臨床にわたり多角的に学修する。
到達目標	1. ニューロンとその構成器官である脳の正常の構造と機能が理解できる。 2. 神経変性・細胞死・可塑性のメカニズムを理解し、認知機能低下の防御法について説明できる。 3. 認知機能を担う神経回路網の構造的機能的相関を理解し、認知症発症のメカニズムを説明できる。 4. BPSD（行動心理周辺症状）から認知機能の低下レベルを把握できる。 5. 言語・非言語コミュニケーションにより認知機能を考察できる。 6. 神経心理学的検査法により認知機能が解析できる。

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	認知機能と認知症	認知機能の低下の要因と認知症発症のメカニズムについてその概略を理解する。	後藤　隆洋
2	感覚、知覚、認知の神経科学的基盤：感覚器、末梢神経系、中枢神経系	脳はニューロンの働きにより外界の情報をどのように統合し、思考・判断の結果行動に移すのか、感覚情報から随意運動までのながれを理解する。	後藤　隆洋
3	神経変性及び神経細胞死のメカニズムの解析	神経変性･細胞死のメカニズムをミトコンドリア、オートファジー及びニューロフィラメント・タウタンパク質の機能障害から考察する。	後藤　隆洋
4	リハビリテーションによる神経可塑性・再生機序	運動、学修、食品の摂取などによるリハビリテーションや身体機能活性化によりニューロンの再生が可能か、最新の文献検索も取り入れ考察する。	後藤　隆洋
5	神経伝達物質・受容体と認知機能との関係	シナプスでの情報伝達の破綻がどのように認知症を引き起こすか、神経伝達物質と受容体の動態と認知機能の変化の関係を考察する。	後藤　隆洋
6	認知機能を担う神経回路網Ⅰ：大脳皮質	認知機能の中枢である大脳皮質の各葉の構成を理解し、種々の感覚情報がどのような回路網で処理され行動として発現されるかを学び、各部位の障害と認知症との関係を考察する。	大篭　友博
7	認知機能を担う神経回路網Ⅱ：大脳辺縁系と大脳基底核	記憶や情動に関わる大脳辺縁系と円滑な運動を遂行する大脳基底核は認知機能に必須であり、これらの部位の障害に特有の認知症について学ぶ。	大篭　友博
8	大脳皮質、辺縁系、基底核、視床の機能的・構造的相関と認知症発症メカニズム	認知機能を担う脳の各部位の相互的連結による作用を総括的に理解し、認知症発症のメカニズムを分子・細胞レベルで考察し、認知症の予防法を検	大篭　友博

		討する。	
9	脳内微小循環の破綻と認知症発症のメカニズムと画像診断	血流の変化、炎症、アミロイドβの沈着などによる細胞外環境の異常や細胞外液（髄液）の循環障害による神経細胞死からの認知症発症機構について画像診断法も併用し考察する。	大篭　友博
10	中核症状と BPSD（行動心理周辺症状）からみた認知機能	認知症の中核症状及び、行動心理周辺症状：BPSD を理解し、認知機能症状を捉える視点を学ぶ。	石川　健二
11	行動指標によるプレクリニカルな評価及び認知症ケア	日常活動の行動指標を用いて、認知症の前段階（プレクリニカル）の症状を評価することにより認知症ケアの要点を理解する。	石川　健二
12	電気生理学（脳波）を用いた軽度認知症の鑑別	聴性誘発事象関連電位を用いたオッドボール課題による脳の反応を検出することで、早期の軽度認知症の重症度を判定する評価法を学ぶ。	石川　健二
13	言語・非言語コミュニケーションと認知機能	言葉のみの使用による言語コミュニケーションと身振りや話し方など言葉以外のやり取りである非言語コミュニケーションの比較から認知機能を解析する方法を学ぶ。	髙橋　泰子
14	神経心理学的検査による認知機能の解析	WAIS（知能検査）や注意障害の有無や程度を把握する CAT（標準注意検査法）などの神経心理学的検査法を用いて認知機能を解析し、考察する。	髙橋　泰子
15	認知症発症・進行予防の最新対策	認知症の発症予防と改善法について最新の文献検索により新規の対策を検討する。	髙橋　泰子

成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
参考文献	寺島俊雄	神経解剖学講義ノート	金芳堂	2011
	医療情報科学研究所	病気がみえる vol.7 脳・神経	MEDIC MEDIA	2017
事前・事後学修留意事項	特になし			
研究室	１号館 後藤研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№	MSS09-1E	授業形態	講義	開講年次	1年次
授業科目名	運動機能解析学	担当教員 E-Mail	古井　透 furuit@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	共通科目		選　　択	2　単位	後　期（30h）

授業概要	歩行、書字、嚥下など、身体運動の回復はリハビリテーションにおける重要な課題である。身体運動の遂行には、筋力・柔軟性・バランス・持久力といった運動機能が不可欠であるが、その他、解剖学的構造、呼吸循環機能、神経機能など様々な要素が関与している。そのため、身体運動は、運動学、力学、生理学などの多様な手法により、多面的に解析されている。本科目は、運動機能に加え、広く、身体の姿勢・運動を解析する手法を紹介し、それらの原理やリハビリテーションにおける具体的な先行研究を学修することで、研究実践力を修得する。
到達目標	1.（坪田）運動機能を多面的に分析する手法が説明ができる。呼吸代謝の分析方法を説明できる。 2.（久利）足圧中心（COP ; center of pressure）を用いた解析の種類と解釈について説明できる。 3.（肥田）デジタルカメラなどの汎用機器を用いた姿勢・動作解析の方法について説明できる。 4.（古井）ISO168450-1 を知り、基準に準拠した車いす座位の表現ができるように身体ランドマークを正確に触察し、マーカーを設置し撮影した写真から身体セグメントの傾きが再現性をもって計測できる 5.（古井）座圧センサーシートを用いた接触圧の計測が正確にできる。 6.（岡）動作解析における３次元動作計測の概要と意義を説明できる。 7.（岡）歩行解析における床反力計測の概要と意義を説明できる。 8.（村西）加速度計を用いた姿勢・動作解析の計測方法と解釈を説明できる。 9.（村西）筋電図を用いた解析手法を説明でき、筋電図による種々の姿勢・動作解析を説明できる。 10.(久保)　筋力測定器を用い、各関節角度と筋力の特徴が説明できる。 11.（久保）筋疲労計測器を用い、各関節運動と筋持久力の特徴が説明できる。 12.（久利）超音波画像診断装置から得られるデータを用いた解析の種類と解釈について説明できる。 13.（大篭）大脳の解剖学的構造と機能・機能分析のためのイメージング技術について説明できる。 14.（坪田）心肺機能結果から運動機能の評価について説明できる。 15.（畑中）発達障害の運動機能評価法の手法やデータの解釈について説明できる。

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	総論・呼気ガス分析による心肺機能解析学	運動機能を解析する手法を概観する。呼吸代謝を分析する手法について学ぶ。	坪田　裕司
2	重心動揺計測による姿勢・動作解析学	COP を用いた解析について学ぶ。	久利　彩子
3	2 次元姿勢解析による姿勢・動作解析学	比較的安価に入手可能な測定機器を応用した姿勢・動作解析手法について学ぶ。	肥田　光正
4	2 次元的車椅子座位姿勢計測法による姿勢・動作解析学	ISO168450-1 に定められた身体ランドマークの適切な触察結果から各身体セグメントの矢状・横断・前額面での位置関係を傾きとして割り出す方法について実地で学ぶ。	古井　透
5	体圧分布計測法による姿勢・動作解析学	体圧の分布について、センサーシートを用いて計測し、矢状・水平・前額３平面での姿勢計測結果とあわせ、その臨床的解釈について学ぶ。	古井　透

6	3 次元動作解析による姿勢・動作解析学	3 次元動作解析とその姿勢・運動解析への応用について、先行研究を通して学ぶ。	岡　健司
7	床反力計測による姿勢・動作解析学	床反力計を用いた歩行計測・解析手法について、先行研究を通して学ぶ。	岡　健司
8	加速度計測による姿勢・動作解析学	加速度計の計測方法および先行研究を通した姿勢・運動解析を学ぶ。	村西　壽祥
9	筋電図測定による運動解析学	筋電図を用いた計測方法および解析手法を学び，先行研究を通した姿勢・運動解析を学ぶ	村西　壽祥
10	筋力測定による運動解析学	基礎から臨床まで様々な測定方法について従来から現在に至るまでの方法を、それぞれの解析手段の変遷を学修する。	久保　峰鳴
11	筋疲労測定による運動解析学	侵襲的・非侵襲的の中で簡便的なものから複雑なものまで定量的評価を紹介し、それぞれの特徴を学ぶ。	久保　峰鳴
12	超音波エコー検査による運動解析学	運動に伴う組織変動をリアルタイムに観察できる超音波画像診断装置を用いた解析について学ぶ。	久利　彩子
13	脳機能計測（fNIRS・PET 等)による脳機能解析学	大脳の機能分類の基礎を解説するとともに、神経科学論文を紹介して最新の脳機能計測方法について疾患を交えながら学修する。	大篭　友博
14	心機能計測による心肺機能解析学	運動機能の評価に用いる運動生理循環生理に基づく心肺機能解析法について文献事例をもとに学ぶ。	坪田　裕司
15	発達障害の運動機能評価法	運動機能の特異的発達障害の運動機能評価を使用した先行研究を紹介し、運動機能の特異的発達障害の運動機能評価手法について学ぶ。	畑中　良太

成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	配布資料			
参考文献				
事前・事後学修留意事項	事前に理学療法に関する運動機能評価に関する文献を検索する。事後は自身の修士論文に関する研究方法に応用するためにより深く理解する。			
研究室	１号館 酒井研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№	MSS10-1E	授業形態	講義	開講年次	１年次
授業科目名	生活行為解析学	担当教員 E-Mail	上島　健 kamishimat@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	支持科目		選　　択	２　単位	後　期（30h）

授業概要	人が生きていく上で営める生活全般の行為(生活行為)は、心身機能の障害によって日常生活活動、家事、仕事、趣味、遊び、対人交流、休養等に支障をきたす。生活行為を阻害している因子を科学的に分析し、作業療法が「人は作業を通して健康や幸福になる」という基本理念と学術的根拠に基づき、作業療法を通して認知予備力を高められるアイデアを創発し、その支援策を地域で検証する。本科目では、身体障害、精神障害、発達期障害、高齢期障害による阻害因子を国際生活機能分類(ICF)の概念に基づく相互作用から生活行為を分析する能力を学修する。
到達目標	1. 作業療法の基本となる「作業」についての作業分析ができる 2. 心身機能の障害による日常生活活動の課題を説明することができる 3. 日常生活活動の課題と生活行為との因果関係を説明することができる 4. 生活行為を阻害している因子について、客観的な指標を用いて説明することができる 5. 作業療法を通して認知予備力を高められるアイデアを創発することができる 6. 障害領域における主な生活行為の阻害因子と国際生活機能分類(ICF)と関連付けができる

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	生活行為向上マネジメントのプロセス概要１	生活行為を向上するためのリハビリテーション評価とアウトカムを学修する。	上島　健
2	生活行為向上マネジメントのプロセス概要２	作業療法の基本となる「作業」における作業分析を学修する。	上島　健
3	生活行為分析のインテーク	本人や家族への聞き取りから、生活行為の目標設定を学修する。	武井　麻喜
4	生活行為分析のアセスメント	基本情報の分析、ICF に基づく分析や予後予測、本人や家族との合意形成を学修する。	武井　麻喜
5	解決すべき課題の抽出と設定　1	現状とそのギャップの把握を学修する。	武井　麻喜
6	解決すべき課題の抽出と設定　2	課題の優先順位付けを学修する。	武井　麻喜
7	解決すべき課題の抽出と設定　3	課題の根本原因の分析を学修する。	水野　貴子
8	生活行為支援のプランニング　1	支援プログラムの立案を学修する。	水野　貴子
9	生活行為支援のプランニング　2	本人・家族・支援者の役割を学修する。	水野　貴子
10	生活行為支援の実際　1	支援プログラムの実行（身体障害領域）	水野　貴子
11	生活行為支援の実際　2	支援プログラムの実行（高齢期領域）	上島　健
12	生活行為支援の実際　3	支援プログラムの実行（精神・発達領域）	武井　麻喜
13	生活行為支援策のモニタリング	再評価、目標達成状況の確認	武井　麻喜
14	生活行為支援策の計画修正	未達成課題の要因分析、支援計画の修正、支援の引継ぎ・多職種への受け渡しを学修する。	武井　麻喜

15	総括	総括		上島　健
成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	特に指定しない。研究テーマに沿って教科書、参考書、文献を紹介する。			
参考文献				
事前・事後学修留意事項	これまでの臨床経験に基づいたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目である。授業時間外の学修も含まれる。			
研究室	１号館 上島研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№	MSS11-1E	授業形態	講義	開講年次	１年次
授業科目名	コミュニケーション解析学	担当教員 E-Mail	塚本　能三 tsukamotoy@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	支持科目		選　　択	２　単位	後　期（30h）

授業概要	コミュニケーションはヒトが社会で生活していく上で必要不可欠なものである。本科目では、小児分野および成人分野におけるコミュニケーションについて細かく解き開き、理論的に研究することを目的とする。コミュニケーションを解析するためには、データを分析することが必要である。様々な手段を用いて集めたデータを細かく確認し、そのうえでデータの構成要素を理論的に調べていくことになる。情報の収集方法、分析方法、さらに解析方法について学修する。
到達目標	1. 関係発達論的視点からの質的研究の方法論として「エピソード記述法」が理解できる。 2. 対象となる聴覚障害者（児）のコミュニケーションの問題について、分析し、把握ができる。 3. 言語コミュニケーションのデータ収集・分析方法を理解することができる。 4. 運動障害性構音障害について、JIN 式発声発語・器官検査を参考にした評価・訓練プログラムの立案ができる。

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	関係発達論的視点からのコミュニケーション発達について	関係発達論とは何かを主に個体能力発達論との相違点を通じて理解する。	塚本　能三
2	質的研究の方法論としてのエピソード記述について	人と人の接面で生じるコミュニケーションを記述する方法としてエピソード記述法を理解する。	塚本　能三
3	原初的コミュニケーションについて	コミュニケーション発達の基盤となる乳幼児期の原初的コミュニケーションを理解する。	塚本　能三
4	語用論的視点からのコミュニケーション発達について	主に前言語期のコミュニケーション発達を語用論的視点から理解する。	塚本　能三
5	聴覚障害者（児）とコミュニケーション	聴覚障害者（児）のコミュニケーションについて、コミュニケーション方法の視点から検討する。	馬屋原 邦博
6	聴覚障害者（児）と聴覚補償機器	聴覚障害者（児）の聴覚補償機器などテクノロジーの活用について検討する。	馬屋原 邦博
7	聴覚障害者（児）とコミュニケーションストラテジー	聴覚障害者（児）の会話におけるコミュニケーションストラテジーや心理社会的側面について検討する。	馬屋原 邦博
8	言語コミュニケーションについて（会話分析）	健常者の会話分析のデータ収集方法を理解する	芦塚 あおい
9	言語コミュニケーションについて（会話分析２）	健常者の会話分析のデータ分析方法を理解する	芦塚 あおい
10	言語障害のコミュニケーションの分析と解析１	言語音レベルから会話レベルまでの言語コミュニケーション障害のデータ収集方法を理解する	芦塚 あおい
11	言語障害のコミュニケーションの分析と解析２	言語音レベルから会話レベルまでの言語コミュニケーション障害のデータ分析方法を理解する	芦塚 あおい

12	コミュニケーションにおける音声言語の役割について	人間にとって自然な言語獲得とは何かを考え、後天的な言語障害について解説する。	和田 英嗣
13	構音障害の本質的な問題とは何かを考える	主に運動障害性構音障害について、運動麻痺だけではなく、全体構造体系として解説する。	和田 英嗣
14	JIN 式発声発語・器官検査の目的と使用方法について	新たに考案された運動障害性構音障害の検査について解説する。	和田 英嗣
15	症例検討（中心問題を評価した上で、最適な訓練を考察する）	事例を提示し、JIN 式発声発語検査を用いた評価・訓練について解説し検討する。	和田 英嗣

成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	廣實真弓	「気になるコミュニケーション障害の診かた」	医歯薬出版	2015
参考文献	串田秀也, 平本毅, 林誠	「会話分析入門」	勁草書房	2017
	鯨岡俊	なぜエピソード記述なのか	東京大学出版会	2013
事前・事後学修留意事項	各回の講義内容について教科書、参考文献その他を通じてあらかじめ概略を理解しておくこと。			
研究室	１号館 木村研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№.	MSS12-1E	授業形態	講義	開講年次	1年次
授業科目名	園芸療法補完代替医療	担当教員 E-Mail	久利　彩子 hisaria@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	支持科目		選　　択	2　単位	後　期（30h）

授業概要	リハビリテーション領域には、園芸療法、動物介在療法、音楽療法、芸術療法、スヌーズレン、内観療法など様々な療法が活用されている。これらの中にはエビデンスに乏しいものもあるが、リハビリテーション領域の多彩な活動を概説したあとに、代表的なものとして園芸療法を取り上げて学修する。 本科目の目標は、1.園芸療法の対象となる人の特性を考慮し、2.対象者の効果的な園芸療法を計画し、3.適切な園芸療法プログラムを実践、4.園芸療法介入の評価を行い、5.症例検討を行う力を育むことである。
到達目標	1.様々な補完代替療法についての知識を得る。 2.園芸療法の目的を理解し、対象となる人の特性を考慮した選択ができる。 3.対象者にとって効果的な園芸療法を計画し、適切な園芸療法プログラムを実践できる。 4.園芸療法介入の評価を行うことができる。

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1～2	活動分析「育てる」① 土つくりと精神・身体・社会機能への影響	耕起動作と身体へのストレス、作業高さと身体への影響、土の種類・加水による（感覚入力の違いによる）筋緊張への影響、障害別の効果について学修する。	久利　彩子 田崎　史江
3～4	活動分析「育てる」② 種まき・球根・苗の定植と精神・身体・社会機能への影響	移植ごてと上肢関節可動域、協調性と定植動作、障害別種まきの手法の区別と巧緻動作維持向上について学修する。	久利　彩子 田崎　史江
5～6	活動分析「育てる」③ 水やり、間引きと精神・身体・社会機能への影響	水やりの道具によるヒト機能への影響、重量の違いとヒト機能への影響について学修し、つまみ動作の種類、はさみとヒト機能、障害別水やり、間引きの工夫などについて学ぶ。	久利　彩子 田崎　史江
7～8	活動分析「育てる」④ 収穫、利活用と精神・身体・社会機能への影響	場面とヒト機能、障害別収穫、利活用のセス新身体機能への影響を学修する。	久利　彩子 田崎　史江
9	園芸療法プログラムの臨床応用効果判定に必要な評価項目	園芸療法プログラムの臨床応用効果判定に必要な評価項目を学修する。	久利　彩子 田崎　史江
10	身近な植物を使用する園芸療法プログラムの計画	身近な植物を使用する園芸療法プログラムの計画方法を学修する。	久利　彩子 田崎　史江
11	身近な植物を使用する園芸療法プログラムの健常成人での実践と活動分析	園芸療法プログラムの健常成人での実践と活動分析を学修する。	久利　彩子 田崎　史江
12	園芸療法プログラムの臨床応用① 残存機能と園芸療法プログラム	計画と実践についてまとめて発表する。	久利　彩子 田崎　史江
13	園芸療法プログラムの臨床応用② 残存機能と園芸療法プログラム	中間報告としてまとめる。	久利　彩子 田崎　史江

14	園芸療法プログラムの臨床応用③ 残存機能と園芸療法プログラム	最終報告を発表する。	久利　彩子 田崎　史江
15	まとめ	最終レジュメを提出し評価を受ける。	久利　彩子 田崎　史江

成績評価方法	演習への取組内容および発表と最終レジュメにより評価する			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	必要に応じてオリジナル資料を配布する			
参考文献				
事前・事後学修留意事項	植物栽培、園芸について興味を持っていることが望ましい。			
研究室	１号館 久利研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№	MSS13-1E	授業形態	講義	開講年次	1年次
授業科目名	精神神経解剖学特論	担当教員 E-Mail	大篭　友博 ohgomorit@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	支持科目		選　　択	2　単位	前　期（30h）

授業概要	脳に存在するニューロンの数は1000億といわれる。このさらに10倍程度のグリア細胞が周囲を取り巻く極めて複雑な構造である。しかも異なる領域が多様な神経回路網を形成し、ニューロン同士の接続部（シナプス）の総数は150兆を超えるともいわれる。この神経回路網が記憶・認知・情動などを生み出す本質的な構造である。臨床神経解剖学特論では発生学・生理学・解剖学の視点を組み合わせながら、神経系の機能解剖学を想起する能力を培う。また正常構造・正常機能のみならず、臨床例をもとにした病理的機能も積極的に取り入れることで、神経系の構造と機能の理解を深める。また、適宜最新の研究論文をハイライトすることにより、新しい課題への対応能力を習得する。
到達目標	1. 大脳皮質の基礎的な形態と機能について説明でき、関連疾患や研究について理解できる。 2. 脳神経の走行や投射形式・機能について説明でき、関連疾患や研究について理解できる。 3. 小脳の基礎的な形態と機能について説明でき、関連疾患や研究について理解できる。 4. 大脳基底核の形態と機能について説明でき、運動疾患と関連研究について理解できる。 5. 大脳辺縁系が担う機能について説明でき、関連疾患や研究について説明できる。

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	ニューロンとグリア細胞	神経系を構成する要素として、ニューロン、グリア細胞、シナプスの基本的な構造を解説する。また、関連する最新の神経科学研究について学修する。	大篭　友博
2	大脳の局所解剖と血液供給	大脳皮質の発生と内部構造について解説する。また、関連する最新の神経科学研究について学修する。	大篭　友博
3	優位半球と失語・失読・前頭葉機能障害	ブロードマン脳地図に基づく、大脳皮質の機能分類とその異常による疾患について学び、関連する最新の神経科学研究をついて学修する。	大篭　友博
4	脳梁とその障害	脳の各領域を繋ぐ線維や、左右差をもとに高次情報処理機構について、疾患を交えながら学び、関連する最新の神経科学研究成果を学修する。	大篭　友博
5	延髄と核上性、核性、核下性障害	延髄に出入りする脳神経の走行・投射経路と、神経核の障害について学修する。	大篭　友博
6	前庭・蝸牛神経と関連疾患・伝音難聴・感音性難聴	橋下部に出入りする脳神経の走行・投射経路と、神経核の障害について学修する。	大篭　友博
7	三叉神経と三叉神経痛・頭頚部関連通	橋上部に出入りする脳神経の走行・投射経路と、神経核の障害について解説する。	大篭　友博
8	顔面神経とその障害	走行が複雑な顔面神経に焦点を当て、走行・投射経路と、神経核の障害について学修する。	大篭　友博
9	視覚伝導路・眼球運動とその障害	眼球との関連性が深い脳神経に焦点を当て、走行・投射経路と、神経核の障害について学修す	大篭　友博

		る。	
10	小脳と小脳性認知情動症候群	小脳の構造と機能について、疾患を交えながら学び、関連する最新の神経科学研究成果を学修する。	大篭　友博
11	脳波と発作・ナルコレプシー	脳波の基礎と、神経機能異常に伴う異常脳波について学修する。	大篭　友博
12	大脳基底核とパーキンソン病	大脳基底核の構造と機能について、疾患を交えながら学び、関連する最新の神経科学研究を学修する。	大篭　友博
13	辺縁系と認知・情動	大脳辺縁系のうち海馬との関連性が深い領域に焦点を当て認知と情動の面から学修し、関連する最新の神経科学研究を学ぶ。	大篭　友博
14	辺縁系と依存・報酬	大脳辺縁系のうち側坐核や腹側被蓋野との関連性が深い領域に焦点を当て依存と報酬の関係性を学び、関連する最新の神経科学研究を学修する。	大篭　友博
15	まとめ	総括	大篭　友博

成績評価方法	教科書を基にした小テスト 30%　レポート　70%の総合評価			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	井出千束	臨床神経解剖学	医歯薬出版株式会社	2013
参考文献	寺島俊雄	神経解剖学講義ノート	金芳堂	2012
事前・事後学修留意事項	医療系大学・専門学校における解剖学を履修済みであることが望ましい。 事後に講義のレジュメをもとに復習をすること。			
研究室	１号館 大篭研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№.	MSM01-1R	授業形態	講義	開講年次	１年次
授業科目名	運動機能リハビリテーション学特論	担当教員 E-Mail	峰久　京子 sakaik@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	専門科目	運動機能科学領域	選択必修	2　単位	前　期（30h）

授業概要	健康寿命の延伸を阻害する重要な因子として、認知機能障害と運動機能障害が今日の健康課題となっている。近年、これらは互いに深く関連しており、領域横断的に二次予防の領域からのアプローチが展開されている。本科目では、老年症候群が将来の認知症発症リスクと密接に関わっていることから、運動器の視点から考える認知症予防の学術的基盤を養う。 また従来、リハビリテーション医療が担ってきた様々な疾病や要介護状態などの重症化予防と再発予防といった三次予防の観点から、側弯症やオスグッドシュラター病など成長期に見られる疾患の重度化予防、二次予防の領域よりスポーツ活動に付随する傷害の予防や就労者の腰痛問題、さらに地域における老年症候群の安全な暮らしのための施策策定に関わる研究など多角的に学び、臨床・研究における視点を学修する
到達目標	1. 認知・運動機能の評価や治療の具体的な方略、研究手法について多面的な視点を学ぶ。 2. 加齢医学分野における老年症候群やフレイルについて理解し、予防策・改善策を実践できる。 3. 科学的知見から廃用症候群の予防法が論証できる。 4. 疼痛メカニズムの理解ができる。 5. 二次障害予防に必要な態度・関わり方・環境が例示できる 6. 支援技術を介して当事者イニシアティブを推進できる 7. 研究の意味を理解し、研究活動を習慣化し、倫理的配慮ができる。

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	老年症候群と認知・運動機能障害	老年症候群について理解し、予防理学療法学としてのポピュレーションアプローチとハイリスクアプローチを学ぶ	峰久　京子
2	ライフステージ別にみた予防理学療法学のアプローチ	学童期における健康課題として特発性側弯症と子どもロコモを取り上げ、運動器検診と事後措置としての地域包括ケアについて学ぶ。	峰久　京子
3	フレイルの体系的理解とそのリスク	老年期の介護予防で重要なフレイルの視点を体系的にそのリスク要因などから学ぶ	今岡　真和
4	ロコモ、骨粗鬆症など老年症候群の原因と評価方法を知る	加齢に伴う変性や脆弱性骨折など老年期の問題とその理学療法学的視点における解決策を学修する	今岡　真和
5	認知機能および認知症とそのリスク	平均寿命の延伸により社会問題化している「認知症」について、生理的メカニズムや理学療法学的視点から予防策や社会実装策を学ぶ	今岡　真和
6	姿勢保持における体幹筋	四足歩行動物と比較しながら、ヒト特有の直立姿勢保持における体幹筋の働きを学ぶ	岡　健司
7	腰痛症の原因と発生状況	腰痛症の多岐にわたる原因と発生状況について、進化医学的観点を含めて学ぶ	岡　健司

8	腰痛に対する評価とトレーニング	腰痛症の評価と治療について総合的に学ぶ	岡　健司
9	疼痛学（急性疼痛，慢性疼痛）	急性疼痛，慢性疼痛について学修する	今井　亮太
10	疼痛学（神経障害性疼痛，中枢性感作症候群）	神経障害性疼痛,中枢性感作症候群について学修する	今井　亮太
11	疼痛学（地域高齢者，就労者）	地域高齢者,就労者が抱える疼痛について学修する	今井　亮太
12	重力と運動器	宇宙医学の知見と臨床現場での観察を関連づけて理解し、それを廃用症候群の予防が実証的に可能なレベルの知識に昇華させる。	古井　透
13	認知症高齢者の二次障害予防	地域生活において、Overuse, Misuse, Disuse 等の二次障害予防に必要な態度・関わり方・環境とは何か、その視点を認知症高齢者へのアプローチを題材に内在化する。	古井　透
14	支援技術とエンパワーメント	支援技術を介して当事者イニシアティブを輝かせることができる。そのため必要な知識と専門職としての態度について説明する。	古井　透
15	総括およびフィードバック	まとめおよび総括を行う。	峰久　京子

成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	必要に応じて配布または指定する			
参考文献	適宜紹介する			
事前・事後学修留意事項	授業テーマに沿った専門書や文献に目を通してください。			
研究室	１号館　酒井研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№	MSM02-1R	授業形態	演習	開講年次	１年次
授業科目名	運動機能リハビリテーション学演習	担当教員 E-Mail	峰久　京子 sakaik@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	専門科目	運動機能科学領域	選択必修	2　単位	後　期（30h）

授業概要	運動機能リハビリテーション学特論で学んだことをベースに、最新の知見と既存の方法論を実施し学際的に学ぶことで、個々の研究の方法論及び介入法を発展させる。 文献レビュー・症例検討を行い、問題点や研究手法について討論する。また、専門的リハビリテーションの実践と研究としての評価や治療のあり方を学び、そして、予防の相やライフステージに応じた健康課題にフォーカスするための量的データや質的データの取り扱いを含めた包括的アセスメントのあり方や、課題の解決に向けたハイリスクアプローチとポピュレーションアプローチの方法を学ぶ。さらに、地域在住高齢者に対するフィールドワークに参加し、認知・運動機能の評価やリハビリテーションの実施計画、研究手法について多面的な視点を学ぶ。
到達目標	1. リハビリテーション学領域における研究対象を理解し、説明できる 2. 研究に必要な理論と手法に関する基礎知識を身につけ、説明できる。 3. 自己のテーマに関する文献を選択して、批判的吟味を行い発表できる。 4. 地域在住者を対象に科学的な検査・測定ができ、老年症候群の種々の判定が適切に行える。 5. 認知・運動機能障害に関する評価、治療について概説できる。 6. 対象者に適切な疼痛の評価，治療が選択できる。 7. 障害とともに生きる人の生活機能の包括的評価ができる。 8. 支援技術を障害の社会的認知の改善に応用できる。

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	研究の進め方と文献レビューについて	基本的な研究の流れと文献収集の方法、論文の批判的吟味について学ぶ。	峰久　京子
2	研究デザインの基礎知識と倫理指針について	様々な研究デザインとガイドライン、倫理指針について学ぶ。	峰久　京子
3	地域在住者におけるフレイルと理学療法アプローチ	フレイルの科学的評価方法を知るとともに、加齢医学分野のエビデンスから効果的な理学療法アプローチを体系的に学ぶ。	今岡　真和
4	地域在住者におけるロコモ、骨粗鬆症と理学療法アプローチ	ロコモ、骨粗鬆症など老年症候群の科学的評価方法を知るとともに、加齢医学分野のエビデンスから効果的な理学療法アプローチを体系的に学ぶ。	今岡　真和
5	地域在住者におけるMCI、認知症と理学療法アプローチ	地域在住者を認知機能の側面から評価、分析を行い、フィールドワーク（貝塚市内の地域在住者へ検査測定の実践）に参加し、研究の計画と実践について学ぶ。	今岡　真和
6	下肢障害の発生機序	スポーツや交通事故などの外傷や関節変性による下肢障害の発生機序について学ぶ。	岡　健司

7	下肢関節障害の運動機能評価	下肢関節障害の特徴を調査する関節制限歩行などの実験的手法を学ぶ。	岡　健司
8	体幹の運動機能評価	体幹運動を捕捉するための運動学的･生理学的手法について学ぶ。	岡　健司
9	疼痛学評価（急性疼痛，慢性疼痛）	急性疼痛，慢性疼痛の評価法，研究データの扱い方について学修する。	今井　亮太
10	疼痛学評価（神経障害性疼痛，中枢性感作症候群）	神経障害性疼痛，中枢性感作症候群の評価法，研究データの扱い方について学修する。	今井　亮太
11	疼痛学評価（地域高齢者，就労者）	地域高齢者，就労者が抱える疼痛の評価法，研究データの扱い方について学修する。	今井　亮太
12	廃用性症候群に対する介入的評価	抗重力活動の促進を、どのように参加につなげたら、当事者の QOL が向上するのか、運動機能と認知機能にどのような影響があるのか、事例を通じて検討する。	古井　透
13	障害とともに生きる人の生涯を見据えた生活機能の包括的評価	成人脳性麻痺者の二次障害による運動機能変化をライフヒストリーデータと GMFCS や CHRT で評価する方法を学ぶ。	古井　透
14	認知･運動機能障害と支援技術	支援技術による移動を獲得していく過程で障害に対する社会的認知が変わっていく過程を、事例を通じて学ぶ。	古井　透
15	総括およびフィードバック	各院生がテーマとする論文あるいは症例についてプレゼンテーションし、グループ討論を行う。全体のまとめと総括を行う。	峰久　京子

成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	必要に応じて配布または指定する			
参考文献	適宜紹介する			
事前・事後学修留意事項	興味のある研究論文を選び、A4 レジュメ 2 枚程度にまとめて発表の準備を行う。研究論文はできるだけ最新のものを選択してください。			
研究室	１号館　酒井研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№	MSM03-2R	授業形態	演習	開講年次	1-2 年次
授業科目名	運動機能科学特別研究	担当教員 E-Mail	今岡　真和 imaokam@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	専門科目	運動機能科学領域	選択必修	8　単位	通年（120h）

授業概要	リハビリテーション疫学・統計学特論、運動機能リハビリテーション学特論･演習その他認知機能と運動科学関連領域の授業で学んだ認知機能と運動機能科学についての知識を集大成するとともに疑問点を明確化し、一つの課題に取り組む。課題解決のためのスキルや用法について、担当教員の指導の下、自主的に学ぶ。さらに研究成果を研究会、学会などで発表するための表現法、プレゼンテーション法および論文の書き方を修得する。 地域在住高齢者のフレイル・サルコペニア調査、地域高齢者の要支援・要介護リスク因子の検討、骨粗鬆症 1 次予防に向けたリエゾンサービスの構築、地域社会再生を取り上げ地域の人的リソースの活用方法に関する検討、軽度認知機能障害（MCI）改善プログラムの開発、ロコモティブシンドロームの関連要因についての横断調査について研究・論文作成を行う。
到達目標	1. 認知機能と運動機能科学領域におけるリハビリテーションの発展に貢献できる研究課題を設定し、研究を企画・計画・実施し、研究成果を発表する能力を身につける。 2. 修士論文の作成を通して、地域住民や実践者・教育者とのネットワークを構築し、研究遂行能力を修得すると共に、実践者や後輩を指導する技術を身につける。 3. 認知科学と運動機能科学分野における高度医療専門職として、幅広い学識と倫理観を有し、予防リハビリテーションや地域リハビリテーションの発展に寄与し、地域もしくは臨床の場でチームリーダーとしての役割を果たす能力を身につける。 4. 修得した専門能力、研究能力を教育・研究に生かし、リハビリテーション医療学の発展に寄与することができ、リハビリテーション学・認知リハビリテーション学分野での実践の向上に貢献できる能力を身につける。

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1～3	研究課題の決定	認知・運動機能科学領域への興味･関心と文献調査などから当該分野の既知と未知を明らかにし、研究テーマの背景と意義を明確にした上で、研究課題を決定する。	今岡　真和
4～8	研究計画の立案	研究課題の解決に必要な取り扱う変数の抽出と研究デザインを考え、研究計画を立案する。	今岡　真和
9～11	研究計画書の作成	研究課題に沿った、研究対象、方法などを検討し、研究計画書を作成する。	今岡　真和
12	研究計画の発表および評価	研究計画を発表し、評価を受ける。	今岡　真和
13～14	研究計画書の修正	研究計画の発表で受けた評価に基づき、研究計画書を修正する。	今岡　真和
15～16	研究倫理申請書の作成	研究対象、研究内容に沿った倫理申請書を作成する。	今岡　真和
17～21	予備研究等の実施	研究の準備を行い、予備研究を行う。	今岡　真和
22～28	研究の実施（前半）	研究計画に基づき、研究を行う。	今岡　真和

29～35	研究の中間まとめ	研究の中間まとめを行い、中間発表会に向けて資料作成を行う。	今岡　真和
36	研究中間発表	研究の中間まとめの公開発表を行う。	今岡　真和
37～44	研究の実施（後半）	研究中間発表の結果を踏まえ、研究をさらに発展させる。	今岡　真和
45～48	研究結果のまとめ	研究結果を科学的･客観的に考察し、まとめる。	今岡　真和
49～58	論文作成	研究結果のまとめに基づいて、追加実験などを行い、その結果を論文として完成させる。	今岡　真和
59～60	論文の発表および評価	修士論文の内容を公開発表会で発表し、最終試験として評価を受ける。	今岡　真和

成績評価方法	研究態度、研究発表会審査結果、論文審査結果により総合的に評価する。			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	特に指定しないが、研究課題に沿った参考書や文献を用いる。			
参考文献				
事前・事後学修留意事項	これまで学修してきたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目であるため、多くは授業時間外学修が主体となる。			
研究室	１号館 今岡研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№.	MSL01-1R	授業形態	講義	開講年次	1年次
授業科目名	生活行為リハビリテーション学特論	担当教員 E-Mail	上島　健 kamishimat@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	専門科目	生活行為科学領域	選択必修	2　単位	前　期（30h）

授業概要	生活行為リハビリテーションを推し進めるにあたって、地域包括ケアシステムに貢献できる生活行為向上マネジメントが開発された背景を理解する。生活行為向上マネジメントは療法士の包括的な思考過程をわかりやすく表したもので、対象者の24時間365日をイメージしつつ、本人の望む生活行為に行動計画の焦点があたるように設計する。生活行為リハビリテーションの1つである生活行為向上マネジメントは障害をもった高齢者向けに開発されたツールであり、「人は作業を通して健康や幸福になる」を基本理念と学術的エビデンスに基づき、リハビリテーションの立場に立った生活行為の自立を目指した介入モデルを理解する。 本講義では、生活行為向上マネジメントとは、生活行為と生活行為の障害、適応範囲、プロセス（メインシートとサブシート）介入、課題の見直し、課題の申し送り等の流れを理解し、さらに訪問と通所リハビリテーションを組み合わせた支援体系の考え方を学び、多職種の連携と協働の重要性と在り方を通じて認知機能を重要視した観点から学ぶ。
到達目標	1. 地域包括ケアシステムと生活行為リハビリテーションの関係を説明ができる 2. 生活行為リハビリテーションの1つである生活行為向上マネジメントの説明ができる 3. リハビリテーションの立場に立った生活行為の自立を目指した介入モデルの説明ができる 4. 生活行為向上マネジメントの流れを説明することができる 5. 訪問と通所リハビリテーションを組み合わせた支援体系の考え方を説明することができる 6. 多職種の連携と協働の重要性と在り方を通じて認知機能を重要視した支援の説明ができる

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	生活行為向上マネジメント概論	生活行為向上マネジメント概論	上島　健
2	生活行為向上マネジメント①	生活行為と生活行為の障害、適応範囲、プロセス（メインシートとサブシート）介入、課題の見直し、課題の申し送り）①	武井　麻喜
3	生活行為向上マネジメント②	生活行為と生活行為の障害、適応範囲、プロセス（メインシートとサブシート）介入、課題の見直し、課題の申し送り）②	武井　麻喜
4	生活行為向上リハビリテーションの歴史	生活行為向上マネジメントの開発された経緯と背景	武井　麻喜
5	生活行為向上マネジメントの運用事例①	運用に当たってのマネジメント①	武井　麻喜
6	生活行為向上マネジメントの運用事例②	運用に当たってのマネジメント②	上島　健
7	多職種と協同作業の実践	実践上の課題、生活行為向上マネジメントの研修システム、今後の学術的発展に向けた展望	上島　健
8	地域包括ケアシステムについて	地域包括ケアシステムについて	寺山　久美子

9	地域包括ケアシステムと生活行為向上マネジメントとの関連性１	多職種の連携ツールとしての生活行為向上マネジメント	寺山　久美子
10	地域包括ケアシステムと生活行為向上マネジメントとの関連性２	地域作業療法における役割	寺山　久美子
11	地域包括ケアシステムと生活行為向上マネジメントとの関連性３	生活行為向上マネジメントを用いた介護予防事業への関わり、地域ケアへの参加等の実践	寺山　久美子
12	心身機能の障害を抱えた対象者の生活行為機能と認知機能との関係1	脳波を中心とする脳生理学的解析について	大嶋　伸雄
13	心身機能の障害を抱えた対象者の生活行為機能と認知機能との関係2	日中の活動量と睡眠リズムの関係などの脳生理学的解析について	大嶋　伸雄
14	心身機能の障害を抱えた対象者の生活行為機能と認知機能との関係3	認知機能と生活行為リハビリテーション支援における今後の展望	大嶋　伸雄
15	総括	総括	上島　健

成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する			
教科書	著者	教科書	著者	教科書
	特に指定しない。研究テーマに沿って教科書、参考書、文献を紹介する。			
参考文献				
事前・事後学修留意事項	これまでの臨床経験に基づいたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目である。授業時間外の学修も含まれる。			
研究室	１号館 上島研究室	研究室	開講時に提示する	

科目№.	MSL02-1R	授業形態	演習	開講年次	１年次
授業科目名	生活行為リハビリテーション学演習	担当教員 E-Mail	上島　健 kamishimat@kawasakigakuen.ac.jp		
基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	専門科目	生活行為科学領域	選択必修	2　単位	後　期（30h）
授業概要	生活行為リハビリテーション学特論の講義を踏まえ、各種事例を通して実際の演習を実施する。 演習手順として、①生活行為向上マネジメントのシートの使い方、②生活行為の希望を聞き取るための面接技法、③対象者の生活行為の目標を一定期間で達成できる具体的な内容としてイメージするためのアセスメント方法、④生活行為の工程を分析する方法と重要性、⑤目標の生活行為に焦点をあてたプログラム立案の考え方、⑥多職種との連携や協働、社会資源を活用することの重要性について理解を深める。特に、多職種との連携と協働にあたっては、リハビリテーションマネジメントの企画運営、介入と効果検証のあり方を整理し、多角的に考察する。				
到達目標	1. 臨床場面で経験した支援事例の報告ができる 2. 生活行為向上マネジメントを用いた臨床支援事例の分析が説明できる 3. 目標の生活行為に焦点をあてたプログラム立案の考え方が説明できる 4. 多職種との連携や協働、社会資源を活用による支援の必要性が説明できる 5. リハビリテーションマネジメントを企画し、その必要性について説明することができる 6. 介入と効果検証のあり方を客観的な指標を用いて分析して説明することができる				

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	生活行為向上マネジメントのシートの使い方	認知機能低下による生活行為リハビリテーション領域で実践されている生活行為向上マネジメントの事例提示	上島　健
2	生活行為の希望を聞き取るための面接技法	実践された支援事例に対する客観的なエビデンス用いた分析	上島　健
3	達成可能な生活行為の目標立案	発達障害領域における事例検討	武井　麻喜
4	生活行為の工程を分析する方法と重要性	精神障害領域における事例検討	武井　麻喜
5	生活行為向上マネジメントを用いた支援の実践事例１	提示された事例に対する多角的な観点からの分析	武井　麻喜
6	目標の生活行為に焦点をあてたプログラム立案の考え方	認知症の事例検討	武井　麻喜
7	認知機能について	在宅高齢者および認知症患者における生活行為機能低下についての事例検討	上島　健
8	地域包括ケアシステム	地域包括ケアシステムの事例検討	寺山　久美子
9	多職種との連携と協働	生活行為向上マネジメントを用いた介護予防事業への関わりとその役割	寺山　久美子
10	社会資源を活用した支援事例	生活行為向上マネジメントを用いた地域ケア会議参加への関わりとその役割	寺山　久美子

11	生活行為向上マネジメントを用いた支援の実践事例３	提示された事例に対する多角的な観点からの分析	寺山　久美子
12	心身機能の障害を抱えた対象者の生活行為機能と認知機能の関係１	脳波などの生理学的指標からの症例分析（障害児例）　～グループ討議～	大嶋　伸雄
13	心身機能の障害を抱えた対象者の生活行為機能と認知機能の関係２	脳波などの生理学的指標からの症例分析（成人例）　～グループ討議～	大嶋　伸雄
14	心身機能の障害を抱えた対象者の生活行為機能と認知機能の関係３	脳波などの生理学的指標からの症例分析（認知症例）　～グループ討議～	大嶋　伸雄
15	総括	総括	上島　健

成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	特に指定しない。研究テーマに沿って教科書、参考書、文献を紹介する。			
参考文献				
事前・事後学修留意事項	これまでの臨床経験に基づいたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目である。授業時間外の学修も含まれる。			
研究室	１号館 上島研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№	MSC01-1R	授業形態	講義	開講年次	1年次
授業科目名	コミュニケーションリハビリテーション学特論	担当教員 E-Mail	坪田　裕司 tsubotay@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	専門科目	コミュニケーション科学領域	選択必修	2　単位	前　期（30h）

授業概要	本科目では、リハビリテーションのベースとなる最近20年間に発展してきた認知科学と言語及び非言語コミュニケーション科学について、精神医学的な基礎、生理学的な基礎、生化学的な基礎、神経心理学的な基礎、心理学的な基礎を学び、それぞれの観点から臨床・研究における視点を学ぶ。また、認知症をはじめとする様々な精神神経疾患の認知機能・言語症状・非言語コミュニケーション障害の特性や発現機序に関する従来の知見・仮説などを学修し、それぞれの障害に対するリハビリテーションの技術と理論について学ぶ。
到達目標	1. 高次脳の発達と認知機能の加齢変化について生理学的に説明ができる。 2. 認知機能とコミュニケーション機能の分析法や検査法について説明できる。 3. コミュニケーションの機能とそれを支える認知機能について心理学的評価法やリハビリテーションへの心理学的アプローチについて説明できる。 4. 認知コミュニケーション機能障害の生化学的指標、生化学的検査の評価とリハビリテーションについて説明できる。

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	認知機能とコミュニケーション機能低下を予防するサプリメント1	講義オリエンテーションと、コミュニケーションの機能およびコミュニケーションを支える認知機能低下を予防する食品としてのサプリメントの効果について、特に梅などの自然食品について学修し、ディスカッションする。	宇都宮　洋才
2	認知機能とコミュニケーション機能低下を予防するサプリメント2	コミュニケーションの機能およびコミュニケーションを支える認知機能低下を予防する食品として不飽和脂肪酸(EPA, DHA など)のサプリメントの効果について学修し、ディスカッションする。	宇都宮　洋才
3	認知機能とコミュニケーション機能低下を予防するサプリメント3	コミュニケーションの機能およびコミュニケーションを支える認知機能低下を予防する食品としてビタミンA, C, Eなどとアポリポ蛋白の効果について学修し、ディスカッションする。	宇都宮　洋才
4	認知機能とコミュニケーション機能の基礎	認知機能とコミュニケーション機能の脳内回路について学修しディスカッションする。	武田　雅俊
5	認知コミュニケーション機能障害の発症機序と病態、分類	認知機能とコミュニケーション機能の脳内回路について学修しディスカッションする。	武田　雅俊
6	認知コミュニケーション機能障害への対応法、治療法	認知症患者の事例をもとに、診断や対応法と共に、適切なリハビリテーションの手法について学修しディスカッションする。	武田　雅俊
7	高次脳機能の発達と加齢変化	認知コミュニケーション機能に繋がる高次脳の生理学的基盤と障害に繋がる変化の概要を学修しディスカッションする。	坪田　裕司

8	脳機能の測定法(脳波分析)	脳波測定の基礎と分析法、評価について学修しディスカッションする。	坪田　裕司
9	脳機能の測定法(NIRS 分析)	その他の NIRS を含む脳神経活動の測定法と評価について学修しディスカッションする。	坪田　裕司
10	認知機能とコミュニケーション機能の生化学的基礎	認知機能とコミュニケーション機能の生化学的基盤について学び、ディスカッションする。	河野　良平
11	認知コミュニケーション機能障害の生化学的指標、生化学・細胞生物学的検査法	認知コミュニケーション機能障害の生化学的指標、生化学的検査方法について学び、ディスカッションする。	河野　良平
12	認知コミュニケーション機能障害における生化学・細胞生物学的検査の評価とリハビリテーション	認知コミュニケーション機能障害の生化学的指標、生化学的検査の評価とリハビリテーションについて学び、ディスカッションする。	河野　良平
13	認知コミュニケーション機能障害と脳イメージングによる評価	認知・コミュニケーション障害と脳イメージング研究の技法について学び、ディスカッションする。	芦塚　あおい
14	認知コミュニケーション機能障害の言語聴覚学的分析と機能回復	認知機能の 6 つのドメインに関する認知機能障害からの機能回復におけるコミュニケーション過程を分析する手法について学び、ディスカッションする。	芦塚　あおい
15	認知コミュニケーション機能障害の言語臨床研究とリハビリテーション	認知症のコミュニケーション障害における最近の新しいコミュニケーション研究の視点と理論について学び、ディスカッションする。	芦塚　あおい

成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する			
教科書	著者	教科書	著者	教科書
	特に指定しない。研究テーマに沿って教科書、参考書、文献を紹介する。			
参考文献				
事前・事後学修 留意事項	配布資料や抄読文献は予習して質問事項など整理し、毎回の復習に１時間以上かけること。			
研究室	１号館 坪田研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№.	MSC02-1R	授業形態	演習	開講年次	１年次
授業科目名	コミュニケーションリハビリテーション学演習	担当教員 E-Mail	坪田　裕司 tsubotay@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	専門科目	コミュニケーション科学領域	選択必修	2　単位	後　期（30h）

授業概要	コミュニケーションリハビリテーション学特論の講義を踏まえ、症例検討と論文講読を通してさらに深く認知機能とコミュニケーションリハビリテーションについて学ぶことを目的とする。 これまでの臨床に有用な科学的エビデンスについて、課題の設定、研究デザイン、研究方法、データ分析、結果の解釈を客観的に議論し、各自の研究につなげる。また、研究の視点をもって高度の臨床活動を行うと同時に、問題発見能力を育て、新たな理論や臨床技法を創出することにつなげる。
到達目標	認知機能とコミュニケーション機能障害とそのリハビリテーションについて、以下を目標とする。 1. 臨床事例を客観的に議論し研究課題を整理できる。 2. 文献から必要な情報を得て、学術的背景からディスカッションできる。

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1	認知機能とコミュニケーション機能の生理学的基盤（1）	認知機能とコミュニケーション機能障害の生理学的側面についての事例をもとに生理学的検査方法について学ぶ。	坪田　裕司
2	認知機能とコミュニケーション機能の生理学的基盤（2）	認知機能とコミュニケーション機能障害の生理学的側面についての事例をもとに生理学的検査方法について学ぶ。	坪田　裕司
3	認知症患者における生理学的変化の事例研究	認知症患者ごとの生理学的指標を検討し、リハビリテーションの実施のために必要な生理学的検査法を検討する。	坪田　裕司
4	認知機能とコミュニケーション機能の脳内回路と機能障害（1）	認知機能とコミュニケーション機能の脳内回路についての最新文献を精読し、認知・コミュニケーション機能障害の症例研究とその病態発症機序について事例ごとに検討する。	武田　雅俊
5	認知機能とコミュニケーション機能の脳内回路と機能障害（2）	認知機能とコミュニケーション機能の脳内回路についての最新文献を精読し、認知・コミュニケーション機能障害の症例研究とその病態発症機序について事例ごとに検討する。	武田　雅俊
6	認知症患者の事例研究における診断や対応法	認知症患者の事例研究に力を入れ、診断や対応法と共に、適切なリハビリテーションの手法について検討する。	武田　雅俊
7	認知機能とコミュニケーション機能低下を予防するサプリメント１	コミュニケーションの機能およびコミュニケーションを支える認知機能低下を予防する食品としてのサプリメントの効果について、特に梅などの自然食品についてディスカッションする。	宇都宮　洋才
8	認知機能とコミュニケーション機能低下を予防するサプリメント２	コミュニケーションの機能およびコミュニケーションを支える認知機能低下を予防する食品として不飽和脂肪酸(EPA, DHA など)のサプリメントの効果についてディスカッションする。	宇都宮　洋才

9	認知機能とコミュニケーション機能低下を予防するサプリメント３	コミュニケーションの機能およびコミュニケーションを支える認知機能低下を予防する食品としてビタミンA, C, Eなどとアポリポ蛋白の効果について、ディスカッションする。	宇都宮　洋才
10	認知機能とコミュニケーション機能の生化学的基礎	認知機能とコミュニケーション機能の生化学的基盤についての最新文献を精読し検討する。	河野　良平
11	認知コミュニケーション機能障害の生化学的指標、生化学・細胞生物学的検査法	認知コミュニケーション機能障害の生化学的指標、生化学的検査方法についての最新文献を精読し検討する。	河野　良平
12	認知コミュニケーション機能障害における生化学・細胞生物学的検査の評価とリハビリテーション	認知コミュニケーション機能障害の生化学的指標、生化学的検査の評価とリハビリテーションについての最新文献を精読し検討する。	河野　良平
13	認知コミュニケーション機能障害と脳イメージングによる評価	認知・コミュニケーション障害と脳イメージング研究の技法について最新文献を精読し検討する。	芦塚　あおい
14	認知コミュニケーション機能障害の言語聴覚学的分析と機能回復	認知機能の６つのドメインに関する認知機能障害からの機能回復におけるコミュニケーション過程を分析する手法について最新文献を精読し検討する。	芦塚　あおい
15	認知コミュニケーション機能障害の言語臨床研究とリハビリテーション	認知症のコミュニケーション障害における最近の新しいコミュニケーション研究の視点と理論について最新文献を精読し検討する。	芦塚　あおい

成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する			
教科書	著者	教科書	著者	教科書
	特に指定しない。研究テーマに沿って教科書、参考書、文献を紹介する。			
参考文献				
事前・事後学修留意事項	配布資料や参考文献は予習して質問事項など整理し、毎回の復習に１時間以上かけること。			
研究室	１号館 坪田研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№.	MSC03-2R	授業形態	演習	開講年次	1-2 年次
授業科目名	コミュニケーション科学特別研究	担当教員 E-Mail	武田　雅俊 masatakeda@kawasakigakuen.ac.jp		

基本項目	科　目　区　分		単　位　数		履修期間
	専門科目	コミュニケーション科学領域	選択必修	8　単位	通年（120h）

授業概要	本研究科で履修した教育研究の知識と技術を基礎に、各大学院生の研究課題について各種研究手法に沿った分析や検証を加え、リハビリテーション科学・コミュニケーション学を基盤とした研究・論文指導を行う。身につけた知識と技能を統合し、様々な問題解決と新たな価値の創造に結び付く能力や姿勢を育成するために、丁寧な個別指導のもと、研究の実践、研究・論文指導を行う。各大学院生の経験と背景に応じて、高度な臨床実践者・研究者としての基本的能力を修得し、認知機能とコミュニケーション機能に関するそれぞれの課題を再度整理するとともに、各種の技術についても高度化を目指す。 認知機能低下に起因するコミュニケーション機能解析のための脳機能画像解析、脳波解析・精神神経薬理学的解析。分子遺伝学的解析法を用いて、認知・コミュニケーション機能についての研究・論文作成を行なう。
到達目標	1. 認知機能とコミュニケーション科学領域におけるリハビリテーションの発展に貢献できる研究課題を設定し、研究を企画・計画・実施し、研究成果を発表する能力を身につける。 2. 修士論文の作成を通して、地域住民や実践者・教育者とのネットワークを構築し、研究遂行能力を修得すると共に、実践者や後輩を指導する技術を身につける。 3. 認知機能とコミュニケーション科学における高度医療専門職として、幅広い学識と倫理観を有し、予防リハビリテーションや地域リハビリテーションの発展に寄与し、地域もしくは臨床の場でチームリーダーとしての役割を果たす能力を身につける。 4. 修得した専門能力、研究能力を教育・研究に生かし、リハビリテーション医療学の発展に寄与することができ、リハビリテーション学・認知リハビリテーション学分野での実践の向上に貢献できる能力を身につける。

授業回数	テーマ	内容	担当教員
1～3	研究課題の決定	認知機能とコミュニケーション科学領域への興味･関心と文献調査などから当該分野の既知と未知を明らかにし、研究テーマの背景と意義を明確にした上で、研究課題を決定する。	武田　雅俊
4～8	研究計画の立案	研究課題の解決に必要な取り扱う変数の抽出と研究デザインを考え、研究計画を立案する。	武田　雅俊
9～11	研究計画書の作成	研究課題に沿った、研究対象、方法などを検討し、研究計画書を作成する。	武田　雅俊
12	研究計画の発表および評価	研究計画を発表し、評価を受ける。	武田　雅俊
13～14	研究計画書の修正	研究計画の発表で受けた評価に基づき、研究計画書を修正する。	武田　雅俊
15～16	研究倫理申請書の作成	研究対象、研究内容に沿った倫理申請書を作成する。	武田　雅俊
17～21	予備研究等の実施	研究の準備を行い、予備研究を行う。	武田　雅俊

22～28	研究の実施（前半）	研究計画に基づき、研究を行う。	武田　雅俊
29～35	研究の中間まとめ	研究の中間まとめを行い、中間発表会に向けて資料作成を行う。	武田　雅俊
36	研究中間発表	研究の中間まとめの公開発表を行う。	武田　雅俊
37～44	研究の実施（後半）	研究中間発表の結果を踏まえ、研究をさらに発展させる。	武田　雅俊
45～48	研究結果のまとめ	研究結果を科学的･客観的に考察し、まとめる。	武田　雅俊
49～58	論文作成	研究結果のまとめに基づいて、追加実験などを行い、その結果を論文として完成させる。	武田　雅俊
59～60	論文の発表および評価	修士論文の内容を公開発表会で発表し、最終試験として評価を受ける。	武田　雅俊

成績評価方法	研究態度、研究発表会審査結果、論文審査結果により総合的に評価する。			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	特に指定しないが、研究課題に沿った参考書や文献を用いる。			
参考文献				
事前・事後学修留意事項	これまで学修してきたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目であるため、多くは授業時間外学修が主体となる。			
研究室	１号館 学長室	オフィスアワー	開講時に提示する	